



# Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 リリース ノート



Sun Microsystems, Inc.  
4150 Network Circle  
Santa Clara, CA 95054  
U.S.A.

Part No: 820-3198  
2007年9月

本書で説明する製品で使用されている技術に関連した知的所有権は、Sun Microsystems, Inc. に帰属します。特に、制限を受けることなく、この知的所有権には、米国特許、および米国をはじめとする他の国々で申請中の特許が含まれています。

U.S. Government Rights – Commercial software. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

本製品には、サードパーティーが開発した技術が含まれている場合があります。

本製品の一部は Berkeley BSD システムより派生したもので、カリフォルニア大学よりライセンスを受けています。UNIX は、X/Open Company, Ltd. が独占的にライセンスしている米国ならびにほかの国における登録商標です。

Sun、Sun Microsystems、Sun のロゴマーク、Solaris のロゴマーク、Java Coffee Cup のロゴマーク、docs.sun.com、Java、Solaris は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) の商標もしくは登録商標です。Sun のロゴマークおよび Solaris は、米国 Sun Microsystems 社の登録商標です。すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャーに基づくものです。

OPEN LOOK および Sun<sup>TM</sup> Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザーおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカルユーザーインターフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは、OPEN LOOK GUI を実装するか、または米国 Sun Microsystems 社の書面によるライセンス契約に従う米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

この製品は、米国の輸出規制に関する法規の適用および管理下にあり、また、米国以外の国の輸出および輸入規制に関する法規の制限を受ける場合があります。核、ミサイル、生物化学兵器もしくは原子力船に関連した使用またはかかる使用者への提供は、直接的にも間接的にも、禁止されています。このソフトウェアを、米国の輸出禁止国へ輸出または再輸出すること、および米国輸出制限対象リスト(輸出が禁止されている個人リスト、特別に指定された国籍者リストを含む)に指定された、法人、または団体に輸出または再輸出することは一切禁止されています。

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われないものとします。

# 目次

---

はじめに .....	7
<b>1 互換性について .....</b>	<b>17</b>
プラットフォームのサポート .....	17
システムの仮想化のサポート .....	18
管理サーバーとコンソール .....	18
Directory Server の変更点 .....	18
Directory Proxy Server の変更点 .....	20
Identity Synchronization for Windows の変更点 .....	20
Directory Server Resource Kit の変更点 .....	21
<b>2 インストールについての注意 .....</b>	<b>23</b>
サポートサービスとライセンス .....	23
サポートサービス .....	23
ライセンス .....	24
Directory Server Enterprise Edition 6.2 の新機能 .....	24
ソフトウェアの入手 .....	25
ハードウェア要件 .....	25
Directory Server のハードウェア要件 .....	26
Directory Proxy Server のハードウェア要件 .....	26
Identity Synchronization for Windows のハードウェア要件 .....	27
Directory Editor のハードウェア要件 .....	27
オペレーティングシステムの要件 .....	27
Directory Server、Directory Proxy Server、および Directory Server Resource Kit のオペレーティングシステム要件 .....	27
Identity Synchronization for Windows のオペレーティングシステム要件 .....	30
Directory Editor のオペレーティングシステム要件 .....	31
ソフトウェア依存関係の要件 .....	32

---

ファイアウォール環境での Identity Synchronization for Windows の要件 .....	34
Directory Service Control Center でサポートされるブラウザ .....	36
インストールに必要な特権と資格 .....	36
Directory Server、Directory Proxy Server、Directory Service Control Center、および Directory Server Resource Kit のインストールに必要な特権 .....	37
Identity Synchronization for Windows のインストールに必要な特権と資格 .....	38
Identity Synchronization for Windows のインストールに関する注意事項 .....	38
Windows Server 2003 での Identity Synchronization for Windows の使用 .....	38
<b>3 Directory Server の修正されたバグと既知の問題点 .....</b>	<b>39</b>
Directory Server 6.2 で修正されたバグ .....	39
Directory Server の既知の問題点と制限事項 .....	40
Directory Server の制限事項 .....	40
Directory Server 6.2 の既知の問題点 .....	42
<b>4 Directory Proxy Server の修正されたバグと既知の問題点 .....</b>	<b>53</b>
Directory Proxy Server 6.2 で修正されたバグ .....	53
Directory Proxy Server の既知の問題点と制限事項 .....	53
Directory Proxy Server の制限事項 .....	53
Directory Proxy Server 6.2 の既知の問題点 .....	54
<b>5 Identity Synchronization for Windows の修正されたバグと既知の問題点 .....</b>	<b>63</b>
Identity Synchronization for Windows で修正されたバグ .....	63
Identity Synchronization for Windows の既知の問題点と制限事項 .....	65
Identity Synchronization for Windows の制限事項 .....	65
システムまたはアプリケーション障害時のデータ回復の実行 .....	66
Identity Synchronization for Windows の既知の問題点 .....	69
<b>6 Directory Editor の修正されたバグと既知の問題点 .....</b>	<b>75</b>
Directory Editor で修正されたバグ .....	75
Directory Editor の既知の問題点と制限事項 .....	76
Directory Editor の制限事項 .....	76
Directory Editor の既知の問題点 .....	77

---

<b>7 Directory Server Resource Kit の修正されたバグと既知の問題点 .....</b>	<b>81</b>
Directory Server Resource Kit について .....	81
Directory Server Resource Kit で修正されたバグ .....	83
Directory Server Resource Kit の既知の問題点と制限事項 .....	83



# はじめに

---

このリリースノートでは、リリース時点で判明している、重要な情報を示します。ここでは、新機能や拡張機能、既知の制限事項や問題点、技術的な注意事項、その他の関連情報を説明します。Directory Server Enterprise Edition をお使いになる前に、このリリースノートをお読みください。

## 内容の紹介

このマニュアルは、以下の章で構成されています。

[第1章 互換性について](#)では、以前のバージョンのコンポーネント製品との互換性や、Directory Server Enterprise Edition ソフトウェアに対して今後予定されている変更について説明しています。

[第2章 インストールについての注意](#)では、ハードウェアおよびソフトウェアの要件など、インストールに関連する事項を扱っています。

[第3章 Directory Server の修正されたバグと既知の問題点](#)では、Directory Server の修正点および問題点の一覧を示しています。

[第4章 Directory Proxy Server の修正されたバグと既知の問題点](#)では、Directory Proxy Server の修正点および問題点の一覧を示しています。

[第5章 Identity Synchronization for Windows の修正されたバグと既知の問題点](#)では、Identity Synchronization for Windows の修正点および問題点の一覧を示しています。

[第6章 Directory Editor の修正されたバグと既知の問題点](#)では、Directory Editor の修正点および問題点の一覧を示しています。

[第7章 Directory Server Resource Kit の修正されたバグと既知の問題点](#)では、Directory Server Resource Kit の概要を紹介しています。この章では、Directory Server Resource Kit の修正点および問題点の一覧も示します。

## Directory Server Enterprise Edition マニュアルセット

この Directory Server Enterprise Edition マニュアルセットでは、Sun Java System Directory Server Enterprise Edition を使用してディレクトリサービスを評価、設計、配備、および管理する方法について説明します。Directory Server Enterprise Edition 用の

クライアントアプリケーションを開発する方法も示します。Directory Server Enterprise Edition マニュアルセットは <http://docs.sun.com/coll/1224.3> から入手できます。

Directory Server Enterprise Edition について理解を深めるには、次の表に示すドキュメントを順番に参照してください。

表 P-1 Directory Server Enterprise Edition マニュアル

マニュアルタイトル	内容
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 リリースノート』	既知の問題を含め、Directory Server Enterprise Edition についての最新情報を提供しています。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Documentation Center 』	マニュアルセットの重要な領域へのリンクを提供しています。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Evaluation Guide 』	このリリースの重要な機能を紹介します。これらの機能の仕組みや提供される利点を、単独システムに実装可能な架空の配備のコンテキストに沿って例示します。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 配備計画ガイド』	Directory Server Enterprise Edition をベースとする、可用性と拡張性に優れたディレクトリサービスを計画および設計する方法について説明します。配備の計画および設計の基本的な概念および原則を提示します。ソリューションのライフサイクルについて検討し、Directory Server Enterprise Edition ベースのソリューションを計画するために使用する概略レベルのサンプルおよび戦略を提供します。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Installation Guide 』	Directory Server Enterprise Edition ソフトウェアのインストール方法について説明します。インストールするコンポーネントを選択する方法、インストール後にそれらのコンポーネントを設定する方法、および設定したコンポーネントが正しく機能することを検証する方法を示します。  Directory Editor のインストール手順については、 <a href="http://docs.sun.com/coll/DirEdit_05q1">http://docs.sun.com/coll/DirEdit_05q1</a> を参照してください。  Directory Editor をインストールする前に、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 リリースノート』に記載されている Directory Editor 関連の情報を必ず参照してください。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Migration Guide 』	Directory Server、Directory Proxy Server、および Identity Synchronization for Windows の以前のバージョンからコンポーネントをアップグレードする手順を示します。

表 P-1 Directory Server Enterprise Edition マニュアル (続き)

マニュアルタイトル	内容
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 管理ガイド』	<p>Directory Server Enterprise Edition をコマンド行から管理するための手順を示します。</p> <p>Directory Service Control Center (DSCC) を使用して Directory Server Enterprise Edition を管理する際のヒントおよび手順については、DSCC のオンラインヘルプを参照してください。</p> <p>Directory Editor の管理手順については、<a href="http://docs.sun.com/coll/DirEdit_05q1">http://docs.sun.com/coll/DirEdit_05q1</a> を参照してください。</p> <p>Identity Synchronization for Windows のインストールおよび設定の手順については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Installation Guide』のパート II 「Installing Identity Synchronization for Windows」を参照してください。</p>
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Developer's Guide』	Directory Server Enterprise Edition の一部として提供されるツールおよび API を利用して、ディレクトリクライアントアプリケーションを開発する方法を示します。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Reference』	Directory Server Enterprise Edition の技術および概念の基礎を紹介し、コンポーネント、アーキテクチャー、プロセス、および機能について説明しています。開発者 API への参照も示しています。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Man Page Reference』	Directory Server Enterprise Edition を通じて利用可能なコマンド行ツール、スキーマオブジェクト、およびその他の公開インタフェースについて説明しています。このドキュメントの個別の節を、オンラインマニュアルページとしてインストールすることができます。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Troubleshooting Guide』	さまざまなツールを使用して問題の範囲を特定し、データを収集し、問題部分の障害追跡を行う手順について説明しています。
『Sun Java System Identity Synchronization for Windows 6.0 Deployment Planning Guide』	Identity Synchronization for Windows の計画と配備に関する一般的なガイドラインやベストプラクティスを示しています。

## 関連資料

SLAMD 分散負荷生成エンジンとは、ネットワークベースのアプリケーションの負荷テストを実行し、パフォーマンスを分析するために設計された Java™ アプリケーションです。SLAMD は当初 Sun Microsystems, Inc. によって、LDAP ディレクトリサーバーのパフォーマンスをベンチマークおよび分析する目的で開発されました。SLAMD は、OSI が承認したオープンソースライセンスである Sun Public License のもとでオープンソースアプリケーションとして公開されています。SLAMD についての情報を入手するには、<http://www.slamd.com/> を参照してください。SLAMD は java.net プロジェクトとしても公開されています。<https://slamd.dev.java.net/> を参照してください。

Java Naming and Directory Interface (JNDI) 技術は、LDAP および DSML v2 を利用した、Java アプリケーションからのディレクトリサーバーへのアクセスをサポートしま

す。JNDIの詳細については、<http://java.sun.com/products/jndi/>を参照してください。『JNDIチュートリアル』には、JNDIの使用方法についての詳しい説明およびサンプルを収録しています。このチュートリアルは<http://java.sun.com/products/jndi/tutorial/>から入手できます。

Directory Server Enterprise Edition のライセンス形態には、スタンドアロン製品、Sun Java Enterprise System のコンポーネント、Sun Java Identity Management Suite などの Sun 製品群の一部、または Sun からのほかのソフトウェア製品へのアドオンパッケージがあります。Java Enterprise System は、ネットワークまたはインターネット環境で分散配備されるエンタープライズアプリケーションをサポートするソフトウェアインフラストラクチャーです。Directory Server Enterprise Edition が Java Enterprise System のコンポーネントとしてライセンスされる場合、<http://docs.sun.com/coll/1286.3> から入手可能なシステムマニュアルに目を通してください。

Identity Synchronization for Windows は Message Queue を制限されたライセンスで使用します。Message Queue のマニュアルは<http://docs.sun.com/coll/1307.2>から入手できます。

Identity Synchronization for Windows は、Microsoft Windows のパスワードポリシーを管理するための製品です。

- Windows Server 2003 のパスワードポリシーについての情報は、[Microsoft TechNet Web サイト](#)で公開されています。
- Windows Server 2003 でのパスワードの変更やグループポリシーについての情報は、[Microsoft TechNet サイト](#)で公開されています。
- Microsoft 証明書サービスのエンタープライズルート認証局に関する情報は、[Microsoft サポートオンライン Web サイト](#)で公開されています。
- Microsoft システムでの LDAP over SSL の設定に関する情報は、[Microsoft サポートオンライン Web サイト](#)で公開されています。

## 再配布可能なファイル

Directory Server Enterprise Edition では、お客様による再配布が可能なファイルは提供されません。

## デフォルトのパスとコマンドの場所

この節では、マニュアルで使用するデフォルトのパスについて説明し、オペレーティングシステムや配備タイプによって異なるコマンドの場所を示します。

## デフォルトのパス

次の表では、このドキュメントで使用するデフォルトのパスについて説明します。インストールされるファイルの詳細な説明については、次の製品マニュアルを参照してください。

- 『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Reference』の第14章「Directory Server File Reference」
- 『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Reference』の第25章「Directory Proxy Server File Reference」
- 『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Reference』の付録A「Directory Server Resource Kit File Reference」

表P-2 デフォルトのパス

プレースホルダ	説明	デフォルト値
<i>install-path</i>	Directory Server Enterprise Edition ソフトウェアのベースインストールディレクトリを表します。  ソフトウェアは、このベース <i>install-path</i> の下位のディレクトリにインストールされます。たとえば、Directory Server ソフトウェアは <i>install-path/ds6/</i> にインストールされます。	<i>dsee_deploy(1M)</i> を使用して ZIP 形式の配布パッケージからインストールするとき、デフォルトの <i>install-path</i> は現在のディレクトリです。 <i>install-path</i> は、 <i>dsee_deploy</i> コマンドの <i>-i</i> オプションを使用して設定できます。Java Enterprise System インストーラを使用する場合など、ネイティブパッケージ配布からインストールする場合、デフォルトの <i>install-path</i> は次のいずれかの場所になります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris システム - /opt/SUNWdsee/</li> <li>■ Red Hat システム - /opt/sun/</li> <li>■ Windows システム - C:\Program Files\Sun\JavaES5\DSEE</li> </ul>
<i>instance-path</i>	Directory Proxy Server または Directory Server のインスタンスのフルパスを表します。  このマニュアルでは、Directory Server には /local/ds/ を、Directory Proxy Server には /local/dps/ を使用します。	デフォルトのパスはありません。ただしインスタンスのパスは、常にローカルファイルシステム上に存在します。  推奨されるディレクトリは以下のとおりです。  /var (Solaris システム)  /global (Sun Cluster を使用する場合)
<i>serverroot</i>	Identity Synchronization for Windows のインストール先の親ディレクトリを表します	インストールごとに異なります。Directory Server では、 <i>serverroot</i> の概念が存在しなくなったことに注意してください。
<i>isw-hostname</i>	Identity Synchronization for Windows インスタンスのディレクトリを表します	インストールごとに異なります

表P-2 デフォルトのパス (続き)

ブレースホルダ	説明	デフォルト値
<code>/path/to/cert8.db</code>	Identity Synchronization for Windows におけるクライアントの証明書データベースのデフォルトのパスおよびファイル名を表します	<code>current-working-dir/cert8.db</code>
<code>serverroot/isw-hostname/logs/</code>	システムマネージャ、各コネクタ、および Central Logger のログを Identity Synchronization for Windows がローカルに保存する場所のデフォルトパスを表します	インストールごとに異なります
<code>serverroot/isw-hostname/logs/central/</code>	Identity Synchronization for Windows セントラルログのデフォルトパスを表します	インストールごとに異なります

### コマンドの場所

以下の表は、Directory Server Enterprise Edition のマニュアルで使用されるコマンドの場所の一覧です。これらの各コマンドの詳細については、それぞれのマニュアルページを参照してください。

表P-3 コマンドの場所

コマンド	Java ES ネイティブパッケージ配布	ZIP 形式の配布パッケージ
cacaoadm	Solaris - <code>/usr/sbin/cacaoadm</code>	Solaris - <code>install-path/dsee6/cacao_2/usr/sbin/cacaoadm</code>
	Red Hat - <code>/opt/sun/cacao/bin/cacaoadm</code>	Red Hat - <code>install-path/dsee6/cacao_2/cacao/bin/cacaoadm</code>
	Windows - <code>install-path\share\cacao_2\bin\cacaoadm.bat</code>	Windows - <code>install-path\dsee6\cacao_2\bin\cacaoadm.bat</code>
certutil	Solaris - <code>/usr/sfw/bin/certutil</code>	<code>install-path/dsee6/bin/certutil</code>
	Red Hat - <code>/opt/sun/private/bin/certutil</code>	
dpadm(1M)	<code>install-path/dps6/bin/dpadm</code>	<code>install-path/dps6/bin/dpadm</code>
dpconf(1M)	<code>install-path/dps6/bin/dpconf</code>	<code>install-path/dps6/bin/dpconf</code>
dsadm(1M)	<code>install-path/ds6/bin/dsadm</code>	<code>install-path/ds6/bin/dsadm</code>

表 P-3 コマンドの場所 (続き)

コマンド	Java ES ネイティブパッケージ配布	ZIP 形式の配布パッケージ
dsccon(1M)	<i>install-path/dscc6/bin/dsccon</i>	<i>install-path/dscc6/bin/dsccon</i>
dsccreg(1M)	<i>install-path/dscc6/bin/dsccreg</i>	<i>install-path/dscc6/bin/dsccreg</i>
dscsetup(1M)	<i>install-path/dscc6/bin/dscsetup</i>	<i>install-path/dscc6/bin/dscsetup</i>
dsconf(1M)	<i>install-path/ds6/bin/dsconf</i>	<i>install-path/ds6/bin/dsconf</i>
dsee_deploy(1M)	提供されていません	<i>install-path/dsee6/bin/dsee_deploy</i>
dsmig(1M)	<i>install-path/ds6/bin/dsmig</i>	<i>install-path/ds6/bin/dsmig</i>
entrycmp(1)	<i>install-path/ds6/bin/entrycmp</i>	<i>install-path/ds6/bin/entrycmp</i>
fildif(1)	<i>install-path/ds6/bin/fildif</i>	<i>install-path/ds6/bin/fildif</i>
idsktune(1M)	提供されていません	zip 形式の配布パッケージを解凍したディレクトリにあります
insync(1)	<i>install-path/ds6/bin/insync</i>	<i>install-path/ds6/bin/insync</i>
ns-accountstatus(1M)	<i>install-path/ds6/bin/ns-accountstatus</i>	<i>install-path/ds6/bin/ns-accountstatus</i>
ns-activate(1M)	<i>install-path/ds6/bin/ns-activate</i>	<i>install-path/ds6/bin/ns-activate</i>
ns-inactivate(1M)	<i>install-path/ds6/bin/ns-inactivate</i>	<i>install-path/ds6/bin/ns-inactivate</i>
repldisc(1)	<i>install-path/ds6/bin/repldisc</i>	<i>install-path/ds6/bin/repldisc</i>
schema_push(1M)	<i>install-path/ds6/bin/schema_push</i>	<i>install-path/ds6/bin/schema_push</i>
smcwebserver	Solaris および Linux - <i>/usr/sbin/smcwebserver</i>  Windows - <i>install-path\share\webconsole\bin\smcwebserver</i>	このコマンドは、ネイティブパッケージ配布を使用してインストールされる DSCC のみに関係します。
wcadmin	Solaris および Linux - <i>/usr/sbin/wcadmin</i>  Windows - <i>install-path\share\webconsole\bin\wcadmin</i>	このコマンドは、ネイティブパッケージ配布を使用してインストールされる DSCC のみに関係します。

## 表記上の規則

このマニュアルでは、次のような字体や記号を特別な意味を持つものとして使用します。

表P-4 表記上の規則

字体または記号	意味	例
<b>AaBbCc123</b>	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上的コンピュータ出力、コード例を示します。	<code>.login</code> ファイルを編集します。 <code>ls -a</code> を使用してすべてのファイルを表示します。 <code>machine_name% you have mail.</code>
<b>AaBbCc123</b>	ユーザーが入力する文字を、画面上的コンピュータ出力と区別して示します。	<code>machine_name%<b>su</b></code> <code>Password:</code>
<i>aabbcc123</i>	変数を示します。実際に使用する特定の名前または値で置き換えます。	ファイルを削除するには、 <code>rm filename</code> と入力します。
『』	参照する書名を示します。	『コードマネージャー・ユーザーズガイド』を参照してください。
「」	参照する章、節、ボタンやメニュー名、強調する単語を示します。	第5章「衝突の回避」を参照してください。 この操作ができるのは、「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ幅を超える場合に、継続を示します。	<code>sun% <b>grep</b> '^#define \</code>  <code><b>XV_VERSION_STRING</b>'</code>

コード例は次のように表示されます。

- C シェル

```
machine_name% command y|n [filename]
```

- C シェルのスーパーユーザー

```
machine_name# command y|n [filename]
```

- Bourne シェルおよび Korn シェル

```
$ command y|n [filename]
```

- Bourne シェルおよび Korn シェルのスーパーユーザー

```
# command y|n [filename]
```

[ ] は省略可能な項目を示します。上記の例は、*filename* は省略してもよいことを示しています。

|は区切り文字(セパレータ)です。この文字で分割されている引数のうち1つだけを指定します。

キーボードのキー名は英文で、頭文字を大文字で示します(例:Shift キーを押します)。ただし、キーボードによってはEnter キーがReturn キーの動作をします。

ダッシュ(-)は2つのキーを同時に押すことを示します。たとえば、Ctrl-DはControl キーを押したままD キーを押すことを意味します。

## コマンド例のシェルプロンプト

次の表は、デフォルトのシステムプロンプトとスーパーユーザープロンプトを示しています。

表 P-5 \ 枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。

シェル	プロンプト
UNIX および Linux システムの C シェル	machine_name%
UNIX および Linux システムの C シェルのスーパーユーザー	machine_name#
UNIX および Linux システムの Bourne シェルおよび Korn シェル	\$
UNIX および Linux システムの Bourne シェルおよび Korn シェルのスーパーユーザー	#
Microsoft Windows のコマンド行	C:\

## 記号の規則

次の表は、この用語集で使用される記号の一覧です。

表 P-6 記号の規則

記号	説明	例	意味
[ ]	省略可能な引数やコマンドオプションが含まれます。	ls [-l]	-l オプションは必須ではありません。
{   }	必須のコマンドオプションの選択肢を囲みます。	-d {y n}	-d オプションには y 引数か n 引数のいずれかを使用する必要があります。
\${ }	変数参照を示します。	\${com.sun.javaRoot}	com.sun.javaRoot 変数の値を参照します。
-	同時に押すキーを示します。	Control-A	Control キーを押しながら A キーを押します。

表 P-6 記号の規則 (続き)

記号	説明	例	意味
+	順番に押すキーを示します。	Ctrl+A+N	Control キーを押してから放し、それに続くキーを押します。
→	グラフィカルユーザーインターフェイスでのメニュー項目の選択順序を示します。	「ファイル」→「新規」 →「テンプレート」	「ファイル」メニューから「新規」を選択します。「新規」サブメニューから「テンプレート」を選択します。

## マニュアル、サポート、およびトレーニング

Sun のサービス	URL	内容
マニュアル	<a href="http://jp.sun.com/documentation/">http://jp.sun.com/documentation/</a>	PDF 文書および HTML 文書をダウンロードできます。
サポートおよび トレーニング	<a href="http://jp.sun.com/supporttraining/">http://jp.sun.com/supporttraining/</a>	技術サポート、パッチのダウンロード、および Sun のトレーニングコース情報を提供します。

# 互換性について

---

この章では、Directory Server Enterprise Edition コンポーネント製品から削除されたか、または非推奨となった機能について説明します。また、Directory Server Enterprise Edition コンポーネント製品の機能のうち、削除される可能性がある機能と非推奨となる可能性がある機能についても説明します。

この章では、次の内容について説明します。

- 17 ページの「プラットフォームのサポート」
- 18 ページの「管理サーバーとコンソール」
- 18 ページの「Directory Server の変更点」
- 20 ページの「Directory Proxy Server の変更点」
- 20 ページの「Identity Synchronization for Windows の変更点」
- 21 ページの「Directory Server Resource Kit の変更点」

インタフェースの安定性分類についての情報は、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Man Page Reference』において、マニュアルページのエン트리ごとに提供されています。

## プラットフォームのサポート

Directory Server Enterprise Edition の将来のリリースでは、Windows 2000、RedHat Advanced Server 3.0、および J2SE プラットフォーム 1.4 はサポートされなくなる可能性があります。一部プラットフォームでは、32 ビット版のソフトウェアのサポートがなくなる可能性があります。これに備えて、Windows、RedHat、および Java SE プラットフォームのより新しいバージョンへの移行、および 64 ビット版ソフトウェアへの移行について計画を始めてください。

Directory Server Enterprise Edition 6.2 は HP-UX をサポートしていません。ただし、将来的には HP-UX のサポートも計画されています。

Directory Server Enterprise Edition 6.2 は、ZIP 形式の配布に限り、SuSE Linux Enterprise Server 9 Service Pack 3 もサポートしています。

## システムの仮想化のサポート

システムの仮想化は、複数のオペレーティングシステム (OS) インスタンスを共有ハードウェア上で個別に実行できるようにするテクノロジーです。機能的にいうと、仮想化された環境でホストされる OS に配備されたソフトウェアは、通常はベースとなるプラットフォームが仮想化されていることを認識しません。Sun では、精選されたシステムの仮想化と OS の組み合わせについて、その Sun Java System 製品のテストを行っています。これは、Sun Java System 製品が、適切な規模と構成の仮想化された環境で、仮想化されていないシステム上の場合と同様に引き続き機能することを実証するためのテストです。仮想化された環境での Sun Java System 製品に対する Sun のサポートの詳細は、<http://docs.sun.com/doc/820-4651> を参照してください。

## 管理サーバーとコンソール

Identity Synchronization for Windows のリモートグラフィカル管理に使用されている管理サーバーおよび Java Swing ベースのコンソールは、将来のリリースでは置き換えられる可能性があります。サービスの管理をすべてブラウザベースで実行して、ファイアウォール経由のアクセスを簡単に設定できるように、Directory Service Control Center が実装されました。

---

注 - Directory Proxy Server および Directory Server ではすでに Directory Service Control Center が利用されています。Directory Proxy Server および Directory Server では、従来のサーバールートアーキテクチャーに代わって新しい管理フレームワークが利用されるようになっています。

---

そのため、Identity Synchronization for Windows でも、次のコマンドは将来のリリースで除外される可能性があります。

- start-admin
- stop-admin
- startconsole

さらに、o=NetscapeRoot 内のすべてが変更される可能性があります。具体的には、o=NetscapeRoot が今後存在しなくなる可能性があります。サーバールートアーキテクチャーは、新しい管理フレームワークによって置き換えられる可能性があります。

また、Directory Service Control Center を使用して Directory Server 連鎖を設定することはできません。

## Directory Server の変更点

Directory Server インスタンスの管理に利用されてきた、従来のコマンド行ツールが非推奨となっています。

次のツールは、すでに削除されています。

- bak2db.pl
- db2bak.pl
- db2index.pl
- db2ldif.pl
- ldif2db.pl
- ns-accountstatus.pl
- ns-activate.pl
- ns-inactivate.pl
- schema\_push.pl
- check-slapd
- getpwenc
- ldif2ldap
- monitor
- restoreconfig
- saveconfig
- suffix2instance
- vlvindex
- /usr/bin/directoryserver
- db2index

次のツールは将来のリリースから削除される可能性があります。

- bak2db
- db2bak
- db2ldif
- ldif2db
- restart-slapd
- start-slapd
- stop-slapd

これらのツールによって提供されていた機能は、新しいコマンド行ツールの `dsadm` および `dsconf` や、その他のコマンドによって置き換えられます。詳細については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Migration Guide』の「Command Line Changes」を参照してください。

Directory Server の変更点に関連して管理作業が受ける影響の詳細については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Migration Guide』の第 5 章「Architectural Changes in Directory Server」を参照してください。

レプリケートされたサーバートポロジを移行する前に、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Migration Guide』の第 4 章「Migrating a Replicated Topology」を確認してください。Directory Server 4 を使用した旧バージョンのレプリケーションのサポートは、このリリースから削除されました。Sun Microsystems は、Directory Server 4 のサポートを 2004 年 1 月に終了しました。

Directory Server インスタンスを作成するとき、パスワードポリシーは初期状態で下位互換に設定されます。アップグレード後、より柔軟できめ細かなパスワードポリシー構成を可能にするために、互換性モードを変更します。ポリシーの変換は Directory Server によって管理されます。下位互換のパスワードポリシー設定は、将来のリリースで削除される可能性があります。

また、Directory Server インスタンスを作成する場合、DN 変更操作のサポートは無効化されています。レプリケーショントポロジ内のすべてのサーバーインスタンスをアップグレードしたあと、DN 変更操作を正常にレプリケートできます。その時点で、各サーバーインスタンスで DN 変更操作のサポートを有効にすることができます。この目的には、`dsconf set-server-prop moddn-enabled:on` コマンドを使用します。

Directory Server 連鎖は非推奨になっており、将来のリリースでは削除される可能性があります。連鎖は Directory Service Control Center では設定できず、また新しいコマンド行ツールでも設定できません。連鎖によって有効化された配備の大部分は現在、Directory Proxy Server の機能を使用して有効化されます。たとえば、データ配布、レプリケーショントポロジ全体にわたるグローバルアカウントのロックアウト、およびディレクトリ情報ツリーのマージは、Directory Proxy Server を使用して実行できます。連鎖に引き続き依存している旧バージョンのアプリケーションの場合は、`ldapmodify` コマンドを使用して連鎖サフィックスプラグインを設定することにより、連鎖の属性を設定できます。これらの属性は、`dse.ldif(4)` に示されています。

『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Developer's Guide』の第2章「Changes to the Plug-In API Since Directory Server 5.2」および『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Developer's Guide』の第3章「Changes to the Plug-In API From Directory Server 4 to Directory Server 5.2」では、プラグイン API の変更点について詳しく説明しています。これらの参照先で非推奨であることが示されているインタフェースは、将来のリリースで削除される可能性があります。

## Directory Proxy Server の変更点

Directory Proxy Server 6.2 のコマンドを使用して Directory Proxy Server 6.0 および 6.1 のインスタンスにアクセスする場合は、移行は必要ありません。ただし、Directory Proxy Server 6.2 のコマンドを使用する前に、Directory Proxy Server 5.x のインスタンスはすべて移行する必要があります。詳細については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Migration Guide』の第6章「Migrating Directory Proxy Server」を参照してください。

## Identity Synchronization for Windows の変更点

Identity Synchronization for Windows の将来のリリースでは、Microsoft Windows NT のすべてのバージョンおよび Service Pack のサポートが廃止される可能性があります。Microsoft は Windows NT のサポートを 2004 年 6 月で終了しています。

Identity Synchronization for Windows にアップグレードする前に、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Migration Guide』の第7章「Migrating Identity Synchronization for Windows」をお読みください。

## Directory Server Resource Kit の変更点

81 ページの「[Directory Server Resource Kit について](#)」では、このリリースの Directory Server Resource Kit における修正点や既知の問題点について説明しています。

LDAP ユーティリティーに関する Sun Solaris システムのマニュアルページでは、Directory Server Enterprise Edition で提供されるバージョンの LDAP ユーティリティー `ldapsearch`、`ldapmodify`、`ldapdelete`、および `ldapadd` についての記述がありません。これらのコマンドは、Solaris システムで別々には提供されなくなり、代わりに将来のバージョンのオペレーティングシステムで提供されるコマンドに統合される可能性があります。LDAP クライアントツールについてのマニュアルページは、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Man Page Reference』を参照してください。



## インストールについての注意

---

この章では、Directory Server Enterprise Edition ソフトウェアをダウンロードする場所と、主なインストール要件について示します。

この章では、次の内容について説明します。

- 23 ページの「サポートサービスとライセンス」
- 24 ページの「Directory Server Enterprise Edition 6.2 の新機能」
- 25 ページの「ソフトウェアの入手」
- 25 ページの「ハードウェア要件」
- 27 ページの「オペレーティングシステムの要件」
- 32 ページの「ソフトウェア依存関係の要件」
- 36 ページの「インストールに必要な特権と資格」
- 38 ページの「Identity Synchronization for Windows のインストールに関する注意事項」

### サポートサービスとライセンス

製品のインストールを開始する前に、サポートとライセンスに関する情報をよく読んでください。

#### サポートサービス

Sun Java System Directory Server Enterprise Edition には、Sun Software Service Standard、Premium、および Premium Plus というプランが用意されています。これらは Sun の販売担当者、販売パートナー、またはオンライン (<http://www.sun.com/sales/index.jsp>) 経由で購入することができます。これらのサービスプランには、電話およびオンラインによる技術サポート、オンデマンドなソフトウェア更新、オンラインシステム管理リソース、サポート通知サービス、ワンストップの相互運用性支援 (Premium プランおよび Premium Plus プランのみ) が含まれています。さらに、Premium Plus プランではお客様中心のサポートチームが対応します。

提供されるすべての機能については、次のサイトを参照してください。<http://www.sun.com/service/serviceplans/software/overview.xml>

Solaris に含まれる無償の 200,000 のディレクトリサーバーエントリに対するメンテナンス契約を購入したいとお考えのお客様は、Sun の販売担当者または販売パートナーを通して、Sun Software Service プランも購入することができます。

Sun の提供するすべてのサービスプログラムを含むサービスリストには、次のサイトからアクセスできます。<http://www.sun.com/servicelist>

## ライセンス

ライセンスは、Directory Server Enterprise Edition を使用して管理するエントリの数に基づいて提供されます。ライセンスが提供されたら、ディレクトリの実装によって最大限の柔軟性を得るために必要な回数だけエントリをレプリケートできます。唯一の条件は、レプリケートしたエントリを変更しないことと、レプリケート後のすべてのエントリを同じオペレーティングシステムに保存することです。レプリケートしたエントリを別のオペレーティングシステム上に保存した場合、それらのエントリについてライセンスを購入する必要性が生じます。

Solaris では、ディレクトリサーバー用に 200,000 のエントリが無償で提供されています。この場合、ライセンスはコアディレクトリサーバーコンポーネントに対してのみ必要で、その他の Directory Server Enterprise Edition コンポーネントに対しては必要ありません。コアディレクトリサーバーコンポーネントから完全な Directory Server Enterprise Edition へのアップグレードを購入できます。

[http://www.sun.com/software/products/directory\\_srvr\\_ee/get.jsp](http://www.sun.com/software/products/directory_srvr_ee/get.jsp) から製品をダウンロードする前に、指定したバージョンの最新のライセンスを確認できます。

## Directory Server Enterprise Edition 6.2 の新機能

Directory Server Enterprise Edition 6.2 は、Directory Server Enterprise Edition 6.1 リリースに次の新機能を追加するパッチリリースです。

- Windows のネイティブ配布。
- 任意のユーザーとして Windows に ZIP 形式の配布パッケージをインストール可能。
- ZIP 形式の配布パッケージでインストールした場合でも、コンソール (DSCC) が利用可能です。『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Installation Guide』の「Installing Directory Service Control Center From Zip Distribution」を参照してください。
- 一部の特定の配備におけるパフォーマンスの向上。

Directory Server Enterprise Edition 6.1 で追加された新機能の一覧については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Evaluation Guide』の「What's New at a Glance」を参照してください。

## ソフトウェアの入手

Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 ソフトウェアは、次の場所からダウンロードできます。

[http://www.sun.com/software/products/directory\\_srvr\\_ee/get.jsp](http://www.sun.com/software/products/directory_srvr_ee/get.jsp)

このダウンロードページは、ダウンロードする必要のある配布の種類に応じて、適切なダウンロードに案内する開始点として機能します。Directory Server Enterprise Edition 6.2 は、次の配布形態で入手できます。

- ネイティブパッケージ配布
- zip 形式の配布パッケージ

この2つの配布の比較については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Installation Guide』の「Directory Server Enterprise Edition Software Distributions」を参照してください。

Directory Server Enterprise Edition 6.2 は、次の形態で入手できます。

- Java ES のインストーラ — Solaris および Linux システムのネイティブパッケージのフルインストーラ。
- ネイティブパッチ — Java ES インストーラを使用してインストールされた Directory Server Enterprise Edition 6.0 および 6.1 のネイティブパッケージをアップグレードするパッチ。

Directory Server Enterprise Edition 6.2 では、SuSE Linux Enterprise Server に対するネイティブパッチの配布はありません。

- ZIP ベースの配布 — Directory Server Enterprise Edition 6.2 をインストールしたり、Directory Server Enterprise Edition 6.0 および 6.1 の ZIP インストール環境をアップグレードするためのスタンドアロンの配布。

パッチの番号については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Installation Guide』の「Software Installation」を参照してください。

現在のインストールをもとに、インストールする必要のあるものを判断するには、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Installation Guide』の「Installation Procedure Quick Reference」を参照してください。

## ハードウェア要件

この節では、Directory Server Enterprise Edition コンポーネント製品のハードウェア要件を示します。

- 26 ページの「Directory Server のハードウェア要件」
- 26 ページの「Directory Proxy Server のハードウェア要件」
- 27 ページの「Identity Synchronization for Windows のハードウェア要件」
- 27 ページの「Directory Editor のハードウェア要件」

## Directory Server のハードウェア要件

Directory Server ソフトウェアの動作には、次のハードウェアサポートが必要です。

構成要素	プラットフォーム要件
RAM	1～2G バイト (評価目的の場合) 最小 2G バイト (本稼働サーバーの場合)
ローカルディスク容量	<p>バイナリ用に 300M バイトのディスク容量。UNIX® システムの場合、ネイティブパッケージからインストールされるバイナリはデフォルトで /opt に配置されます。評価目的の場合、サーバーソフトウェア用にさらに 2G バイトのディスク容量を用意する必要があります。</p> <p>Directory Server を使用している場合、Directory Server に格納されるエントリがローカルディスク領域を使用することを考慮してください。Directory Server では、NFS マウントされたファイルシステム上にインストールされるログおよびデータベースはサポートされていません。ローカルファイルシステム上の /var/opt 内や /local 内などの領域に、データベースを収容するための十分な容量を確保する必要があります。一例として、最大で 250,000 個のエントリが存在し、写真などのバイナリ属性がない一般的な本稼働配備で、4G バイトがこの容量の目安となります。</p> <p>Directory Server は、ログファイル用に 1.2G バイトを超えるディスク容量を使用することがあります。4G バイトという記憶容量はデータベースに対してのみで、ログは含まれていないことに注意する必要があります。</p> <p>Directory Server は SAN ディスク記憶装置をサポートしています。SAN ディスクを使用する前に、ディスクのレイアウトや設計を理解しておく必要があります。1 つのディスクから多数のアプリケーションが同時にデータアクセスした場合、システムの書き込みパフォーマンスに影響が出るからです。</p>

## Directory Proxy Server のハードウェア要件

Directory Proxy Server ソフトウェアの動作には、次のハードウェアサポートが必要です。

構成要素	プラットフォーム要件
RAM	1～2G バイト (評価目的の場合) 最小 2G バイト (本稼働サーバーの場合)

構成要素	プラットフォーム要件
ローカルディスク容量	<p>バイナリ用に 300M バイトのディスク容量。UNIX システムの場合、ネイティブパッケージからインストールされるバイナリはデフォルトで /opt に配置されます。</p> <p>評価目的の場合、デフォルト構成の使用時において、サーバーログを保持するための追加ディスク容量を 1 サーバーインスタンスにつき 2G バイト確保する必要があります。</p> <p>Directory Proxy Server では、NFS マウントされたファイルシステムへのインストールはサポートされていません。ローカルファイルシステム上の /var/opt 内や /local 内などの領域に、サーバーインスタンスとそのインスタンスによって使用されるすべてのファイルを収容できる十分な容量を確保する必要があります。</p>

### Identity Synchronization for Windows のハードウェア要件

Identity Synchronization for Windows ソフトウェアの動作には、次のハードウェアサポートが必要です。

構成要素	プラットフォーム要件
RAM	コンポーネントがインストールされるすべての場所に 512M バイト (評価目的の場合)。より多くの RAM を搭載したハードウェアを推奨します。
ローカルディスク容量	400M バイトのディスク容量 (最小構成、Directory Server との同時インストール時)。

### Directory Editor のハードウェア要件

Directory Editor のインストールに先立ち、リリースノートの [第 6 章 Directory Editor の修正されたバグと既知の問題点](#) をお読みください。

また、詳細については Directory Editor のマニュアル ([http://docs.sun.com/coll/DirEdit\\_05q1](http://docs.sun.com/coll/DirEdit_05q1)) を参照してください。

## オペレーティングシステムの要件

この節では、Directory Server Enterprise Edition コンポーネント製品をサポートするために必要なオペレーティングシステム、パッチ、およびサービスパックを示します。

### Directory Server、Directory Proxy Server、および Directory Server Resource Kit のオペレーティングシステム要件

Directory Server、Directory Proxy Server、および Directory Server Resource Kit は、同じオペレーティングシステム要件を共有しています。これらのソフトウェアコンポーネントは、次の表に示されているバージョンの各種オペレーティングシステム上で

動作します。一部のオペレーティングシステムでは、次の表に示されている追加のサービスパックまたはパッチが必要な場合があります。

オペレーティングシステム	サポートされる OS バージョン	必要な追加ソフトウェア
Solaris™ オペレーティングシステム	Solaris 10 オペレーティングシステム (SPARC®, x86、および AMD x64 アーキテクチャー)	パッチ: <ul style="list-style-type: none"> <li>■ (SPARC) <a href="#">118833</a>, <a href="#">119689</a>, <a href="#">119963</a>, <a href="#">122032</a>, および <a href="#">119254</a> または置換パッチ</li> <li>■ (x86/x64) <a href="#">118855</a>, <a href="#">119964</a>, <a href="#">121208</a>, <a href="#">122033</a>, および <a href="#">119255</a> または置換パッチ</li> </ul>
	Solaris 9 オペレーティングシステム (SPARC および x86 アーキテクチャー)	パッチ: <ul style="list-style-type: none"> <li>■ (SPARC) <a href="#">111711</a>, <a href="#">111712</a>, <a href="#">111722</a>, <a href="#">112874</a>, <a href="#">112963</a>, <a href="#">113225</a>, <a href="#">114344</a>, <a href="#">114370</a>, <a href="#">114371</a>, <a href="#">114372</a>, および <a href="#">114373</a> または置換パッチ</li> <li>■ (x86) <a href="#">111713</a>, <a href="#">111728</a>, <a href="#">113986</a>, <a href="#">114345</a>, <a href="#">114427</a>, <a href="#">114428</a>, <a href="#">114429</a>, <a href="#">114430</a>, <a href="#">114432</a>, <a href="#">116545</a>, および <a href="#">117172</a> または置換パッチ</li> </ul>
Red Hat Linux (64 ビット Red Hat システムでは、Directory Server は 32 ビットモードで動作する)	Red Hat Advanced Server 3.0 U4 (x86 および AMD x64)  Red Hat Advanced Server 4.0 U2 (x86 および AMD x64)	追加のソフトウェアは必要ありません。  次の互換性ライブラリを推奨:  <code>compat-gcc-32-3.2.3-47.3.i386.rpm</code>  <code>compat-gcc-32-c++-3.2.3-47.3.i386.rpm</code>  次の互換性ライブラリが必要:  <code>compat-libstdc++-33-3.2.3-47.3.rpm</code>  64 ビットシステム上で Red Hat を実行している場合でも 32 ビットシステムライブラリをインストールします。  これらの互換性ライブラリは、Red Hat メディアまたは <a href="https://www.redhat.com/rhn/rhndetails/update/">https://www.redhat.com/rhn/rhndetails/update/</a> から入手できます。
SuSE (64 ビット SuSE システムでは、Directory Server は 32 ビットモードで動作する)	SuSE Linux Enterprise Server 9 (x86 および AMD x64)	Service Pack 3

オペレーティングシステム	サポートされる OS バージョン	必要な追加ソフトウェア
Microsoft Windows	Windows 2000 Server	Service Pack 4
(64 ビット Windows システムでは、Directory Server は 32 ビットモードで動作する)	Windows 2000 Advanced Server	Service Pack 4
	Windows Server 2003 Standard Edition	Service Pack 1
	Windows Server 2003 Enterprise Edition	Service Pack 1

注 - Directory Server Enterprise Edition 6.2 は HP-UX をサポートしていません。ただし、将来的には HP-UX のサポートも計画されています。

SuSE Linux Enterprise Server に Directory Server Enterprise Edition 6.2 をインストールする前に、次の指示を確認する必要があります。

- SuSE Linux では、Directory Server および Directory Proxy Server のみがサポートされます。このサポートは、ZIP 形式の配布パッケージでのみ提供されます。
- SuSE Linux では、root 特権でインストールしなければ、DSCC を使用してサーバーをリモートから管理できません。
- プラグイン可能認証モジュール (PAM) ライブラリのパッチを適用する必要があります。  
パッチが適用されなければ、DSCC は DSCC エージェントを認証できません。
- 64ビット版の SuSE に pam-32bit-9-yyyymmddhhmm.rpm をインストールする必要があります。  
pam-32bit-9-yyyymmddhhmm.rpm がインストールされなければ、cacaoadm start は失敗します。
- Linux 用の配布ファイルには、「RedHat」とラベルが付けられていますが、実際には RedHat と SuSE Linux の両方で動作します。

Solaris パッチクラスタを入手すると、ほとんどの個別パッチのダウンロードを回避できます。Solaris パッチクラスタを入手するには、次の手順に従います。

1. <http://sunsolve.sun.com/pub-cgi/show.pl?target=patchpage> の SunSolve パッチページにアクセスします。
2. 「推奨パッチクラスタ」リンクをクリックします。
3. お使いの Solaris OS と Java ES バージョンに対応するパッチクラスタをダウンロードします。

Directory Server Enterprise Edition ソフトウェアの動作確認は、一覧中のオペレーティングシステムの「ベース」、「エンドユーザー」、または「コア」と呼ばれる限定構成ではなく完全インストールを使用して実施しています。

Directory Server は、次のプラットフォームでは 64 ビットモードで動作します。

- Solaris SPARC
- Solaris 10 AMD x64 システム

Directory Server は、次のプラットフォームでは 32 ビットモードで動作します。

- Solaris x86 システム
- Solaris 9 AMD x64 システム
- Red Hat システム (x86 および AMD x64)
- SuSE Linux Enterprise Server 9 SP3 (x86 および AMD x64)

Directory Server と Directory Proxy Server は、Windows NTFS システム上にインストールする必要があります。共通エージェントコンテナは、Windows FAT システム上ではサポートされていません。

SuSE Linux Enterprise Server の `/etc/profile.d/` には、インストールされたソフトウェアに応じて適切な環境を自動的に設定する、一連のスクリプトがあります。したがって、コマンドを使用して製品を動作させる前に、次の Java 環境変数を空にリセットする必要があります。

- JAVA\_BINDIR
- JAVA\_HOME
- JRE\_HOME
- JAVA\_ROOT

### Identity Synchronization for Windows のオペレーティングシステム要件

Identity Synchronization for Windows コンポーネントは、次の表に示すバージョンの各種オペレーティングシステム上で動作します。一部のオペレーティングシステムでは、次の表に示されている追加のサービスパックまたはパッチが必要な場合があります。

### コアコンポーネントとコネクタに対する Identity Synchronization for Windows の要件

次の表は、Directory Server および Active Directory のコアコンポーネントとコネクタに対するオペレーティングシステムの要件を示しています。

オペレーティングシステム	サポートされる OS バージョン	必要な追加ソフトウェア
Solaris Operating System	Solaris 10 オペレーティングシステム (UltraSPARC® および x86 (Pentium) アーキテクチャー)	追加のソフトウェアは必要ありません。
	Solaris 9 オペレーティングシステム (SPARC アーキテクチャー)	追加のソフトウェアは必要ありません。
	Solaris 8 オペレーティングシステム (UltraSPARC アーキテクチャー)	追加のソフトウェアは必要ありません。
Red Hat Linux	Red Hat Advanced Server 4.0	追加のソフトウェアは必要ありません。
	Red Hat Advanced Server 3.0	追加のソフトウェアは必要ありません。
Microsoft Windows	Windows 2000 Server	Service Pack 4
	Windows 2000 Advanced Server	Service Pack 4
	Windows Server 2003 Standard Edition	最新のセキュリティ更新の適用
	Windows Server 2003 Enterprise Edition	最新のセキュリティ更新の適用

注 - SuSE システムでは Identity Synchronization for Windows はサポートされていません。

### Windows NT に対する Identity Synchronization for Windows の要件

次の表は、Windows NT のコンポーネントとコネクタに対するオペレーティングシステムの要件を示しています。

オペレーティングシステム	サポートされる OS バージョン	必要な追加ソフトウェア
Microsoft Windows	Windows NT Server 4.0 プライマリドメインコントローラ (x86 アーキテクチャー)	Service Pack 6a

### Directory Editor のオペレーティングシステム要件

Directory Editor のインストールに先立ち、リリースノートの [第 6 章 Directory Editor の修正されたバグと既知の問題点](#)をお読みください。

また、詳細については Directory Editor のマニュアル ([http://docs.sun.com/coll/DirEdit\\_05q1](http://docs.sun.com/coll/DirEdit_05q1)) を参照してください。

## ソフトウェア依存関係の要件

Directory Server は、暗号化アルゴリズムを Network Security Services (NSS) レイヤーに依存します。NSS は、Solaris 10 システムで提供され、暗号化促進デバイスをサポートする Sun 暗号化フレームワークとの組み合わせで正しく機能することが確認されています。

Windows システムでは、アカウントのアクティブ化や手動のスキーマレプリケーションのコマンドを使用するには、Directory Server に ActivePerl ソフトウェアが必要です。ActivePerl は Directory Server Enterprise Edition には付属しません。この依存関係は、次のコマンドに影響します。

- ns-accountstatus(1M)
- ns-activate(1M)
- ns-inactivate(1M)
- schema\_push(1M)

Windows では、Directory Service Control Center が正しく動作するようにするために、ポップアップブロックを無効にする必要があります。

Directory Proxy Server を Solaris、Red Hat、および Windows システムで動作させるには、Java ランタイム (JRE) のバージョン 1.5.0\_09 以上が必要になります。JRE は ZIP 形式の配布パッケージからインストールされます。JAVA\_HOME 環境変数セットを使用して ZIP 形式の配布パッケージからインストールする場合は、JAVA\_HOME で指定された Java Runtime Environment が使用されます。お使いの環境に JAVA\_HOME が設定されている場合は、最新版であることを必ず確認してください。

Directory Proxy Server は、どの LDAPv3 準拠のディレクトリサーバーでも動作できますが、Sun Java System Directory Server でしかテストされていません。

仮想化については、Directory Proxy Server は、次に示すドライバを使用して、次の JDBC データソースで検証されています。ただし、Directory Proxy Server はすべての JDBC 3 準拠のドライバで動作します。

JDBC データソース	JDBC ドライバ
DB2 v9	IBM DB2 JDBC Universal Driver Architecture 2.10.27
JavaDB 10.2.2.0	Apache Derby Network Client JDBC Driver 10.2.2.0

---

JDBCデータソース	JDBCドライバ
MySQL 5.0	MySQL-AB JDBC ドライバ mysql-connector-java-5.0.4
Oracle 9i Database	Oracle JDBC ドライバ
Oracle 10g Database	10.2.0.2.0

---

Windows システムでは、MKS シェルから `dsee_deploy` コマンドを実行した場合、Common Agent Container (cacao) にソフトウェアを正しく登録できません。この問題は、MKS の PATH に `system-drive:\system32` フォルダが含まれていない場合に発生することがあります。その場合は、別の方法として、Windows のネイティブなコマンドプロンプトからコマンドを実行してください。

Solaris 10 では、`rc.scripts` が推奨されていないので、`dsadm autostart` などのコマンドはサポートされていません。これらのタイプの要求を処理するには、代わりに Solaris 10 Service Management Facility (SMF) を使用します。たとえば、`dsadm enable-service` などです。SMF の詳細については、Solaris のマニュアルを参照してください。

Identity Synchronization for Windows をインストールする前に、JRE や Message Queue を含め、前提条件の Sun Java System ソフトウェアコンポーネントをインストールする必要があります。

- Identity Synchronization for Windows には JRE は付属しません。

Identity Synchronization for Windows インストーラの動作には J2SE または JRE 1.5.0\_09 が必要です。

Windows NT 上での Identity Synchronization for Windows の動作には JRE 1.5.0\_09 が必要です。

- このリリースの Identity Synchronization for Windows には Message Queue 3.6 がバンドルされています。

Identity Synchronization for Windows をインストールする場合は、使用するバージョンの Message Queue へのパスを指定する必要があります。それにより、Identity Synchronization for Windows インストールプログラムは、Identity Synchronization for Windows が Message Queue を使用して同期できるように、必要なブローカを Message Queue にインストールします。

Windows システムでは、Identity Synchronization for Windows は Message Queue 3.6 のみをサポートしています。そのため、Identity Synchronization for Windows にバンドルされている Message Queue 3.6 をインストールしてください。

ただし、Message Queue 3.7 は Java Enterprise System 共有コンポーネントとしてインストールされます。そのため、結果として Windows システム上で、Message Queue 3.6 と Message Queue 3.7 の両方がインストールされる可能性があります。Java Enterprise System コンポーネントを Identity Synchronization for Windows とともに Windows システムにインストールする場合は、Message Queue 3.7 を選択しないようにしてください。

Windows システムでは、コンソールおよび管理サーバーとともにインストールされた JRE には、夏時間の変更に対する修正が含まれていません。インストールのあと、夏時間の変更に対する修正を適用する必要があります。JRE を修正するには、[http://java.sun.com/javase/tzupdater\\_README.html](http://java.sun.com/javase/tzupdater_README.html) で説明されている tzupdater ツールを使用します。修正対象の JRE は、インストール後、コンソールと管理サーバーをインストールした場所の `ServerRoot/bin/base/jre/` に格納されます。

### ファイアウォール環境での Identity Synchronization for Windows の要件

Identity Synchronization for Windows はファイアウォール環境での実行が可能です。次の各節では、ファイアウォールを通して公開する必要があるサーバーポートの一覧を示しています。

### Message Queue の要件

Message Queue はデフォルトで、そのポートマッパーを除くすべてのサービスに対して動的ポートを使用します。ファイアウォールを通して Message Queue ブローカにアクセスする場合、すべてのサービスに対して固定ポートを使用するようにブローカを設定してください。

コアのインストール後、ブローカの設定プロパティ `imq.<service_name>.<protocol_type>.port` を設定する必要があります。特に、`imq.ssljms.tls.port` オプションを設定する必要があります。詳細については、Message Queue のマニュアルを参照してください。

### インストーラの要件

Identity Synchronization for Windows インストーラは、設定ディレクトリとして機能している Directory Server と通信できる必要があります。

- Active Directory コネクタをインストールする場合、インストーラが Active Directory の LDAP ポート (389) と通信できる必要があります。
- Directory Server コネクタまたは Directory Server プラグイン (サブコンポーネント) をインストールする場合、インストーラが Directory Server の LDAP ポート (デフォルトで 389) と通信できる必要があります。

### コアコンポーネントの要件

Message Queue、システムマネージャー、およびコマンド行インタフェースが、Identity Synchronization for Windows の設定が保存された Directory Server と通信できる必要があります。

### コンソールの要件

Identity Synchronization for Windows コンソールが、次に示すコンポーネントと通信できる必要があります。

- Active Directory (LDAP 経由の場合ポート 389、LDAPS 経由の場合ポート 636)
- Active Directory グローバルカタログ (LDAP 経由の場合ポート 3268、LDAPS 経由の場合ポート 3269)
- 各 Directory Server (LDAP または LDAPS 経由)
- 管理サーバー
- Message Queue

### コネクタの要件

すべてのコネクタが Message Queue と通信できる必要があります。

加えて、コネクタに関する次の要件が満たされている必要があります。

- Active Directory コネクタが、LDAP 経由 (ポート 389) または LDAPS 経由 (ポート 636) で Active Directory ドメインコントローラにアクセスできる必要があります。
- Directory Server コネクタが、LDAP 経由 (デフォルトポート 389) または LDAPS 経由 (デフォルトポート 636) で Directory Server インスタンスにアクセスできる必要があります。

### ファイアウォール環境での Directory Server プラグインの要件

各 Directory Server プラグインが、Directory Server コネクタのサーバーポート (コネクタのインストール時に選択したもの) と通信できる必要があります。Directory Server マスターレプリカで動作するプラグインは、Active Directory の LDAP ポート (389) または LDAPS ポート (636) に接続できる必要があります。その他の Directory Server レプリカで動作するプラグインは、マスター Directory Server の LDAP ポートおよび LDAPS ポートと通信できる必要があります。

### Directory Service Control Center でサポートされるブラウザ

次の表に、Directory Service Control Center をサポートするブラウザをオペレーティングシステムごとに示します。

オペレーティングシステム	サポートされるブラウザ
Solaris 10 および Solaris 9 (SPARC および x86)	Netscape™ Communicator 7.1、Mozilla™ 1.7.12、および Firefox 1.0.7、1.5、および 2.0
Red Hat Linux 4、Red Hat Linux 3 および SuSE Linux	Mozilla 1.7.12 および Firefox 1.0.7、1.5、および 2.0
Windows XP	Netscape Communicator 8.0.4、Microsoft Internet Explorer 6.0SP2、Mozilla 1.7.12、および Firefox 1.0.7、1.5 および 2.0
Windows 2000/2003	Netscape Communicator 8.0.4、Microsoft Internet Explorer 6.0SP1、Mozilla 1.7.12、および Firefox 1.0.7、1.5 および 2.0

## インストールに必要な特権と資格

この節では、Directory Server Enterprise Edition コンポーネント製品のインストールに必要な特権および資格について説明します。

- 37 ページの「Directory Server、Directory Proxy Server、Directory Service Control Center、および Directory Server Resource Kit のインストールに必要な特権」
- 38 ページの「Identity Synchronization for Windows のインストールに必要な特権と資格」

## Directory Server、Directory Proxy Server、Directory Service Control Center、および Directory Server Resource Kit のインストールに必要な特権

Java Enterprise System ネイティブパッケージベースの配布から Directory Server、Directory Proxy Server、または Directory Service Control Center をインストールするには、次の特権が必要です。

- Solaris、Red Hat、および SuSE システムでは、root 特権でインストールを行う必要があります。
- Windows システムでは、Administrator 特権でインストールを行う必要があります。

ZIP 形式の配布パッケージから Directory Server、Directory Proxy Server、および Directory Server Resource Kit をインストールする場合には、特別な特権は必要ありません。

詳細については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Installation Guide』の「Directory Server Enterprise Edition Software Distributions」を参照してください。

### アップグレードの前に

Directory Server Enterprise Edition 6.2 のパッチを適用する前に、次の点を考慮する必要があります。

- ネイティブパッケージベースの配布の場合。DSEE 6.2 のパッチを適用する前に、すべての Directory Server および Directory Proxy Server インスタンス (DSCC レジストリを含む) を停止する必要があります。

サーバーインスタンスを停止せずにパッチを適用すると、次回再起動時にインスタンスがクラッシュする可能性があります。

ローカライズ版のコンソールを使用するには、Directory Server Enterprise Edition 6.2 のローカライズ版のパッチの前に Directory Server Enterprise Edition 6.2 パッチを適用してください。さらに、次に示すコマンドを指定された順序で実行します。

```
# dscsetup console-unreg  
# dscsetup console-reg
```

- zip ベースの配布の場合。DSEE 6.2 の ZIP 形式の配布を DSEE 6.0 および 6.1 の ZIP インストール環境に適用する前に、すべての Directory Server および Directory Proxy Server インスタンスを停止する必要があります。このチェックは `dsee_deploy` コマンドそのものによって実行されますが、Windows 2000 では動作しません。

サーバーインスタンスを停止せずにパッチを適用すると、次回再起動時にインスタンスがクラッシュする可能性があります。

注-パッチを適用して Directory Server Enterprise Edition をアップグレードしたあとは、次のコマンドを実行して Sun Web Console を再起動します。

```
# smcwebserver restart
```

---

### Identity Synchronization for Windows のインストールに必要な特権と資格

Identity Synchronization for Windows をインストールするには、次のコンポーネントに対する資格情報を用意する必要があります。

- 設定 Directory Server。
- 同期対象の Directory Server。
- Active Directory。  
詳細については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Installation Guide』の「Installing Core」を参照してください。

加えて、Identity Synchronization for Windows をインストールするには次の特権が必要です。

- Solaris および Red Hat システムでは、root 特権でインストールを行う必要があります。
- Windows システムでは、Administrator 特権でインストールを行う必要があります。

---

注-テキストベースのインストーラを使用してパスワードを入力するとき、パスワードはプログラムによって自動的にマスクされ、そのまま画面に表示されることはありません。テキストベースのインストーラは Solaris および Red Hat システムでのみサポートされています。

---

## Identity Synchronization for Windows のインストールに関する注意事項

Identity Synchronization for Windows を新規インストールする前に、必ず『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Installation Guide』の第5章「Preparing for Installation」をお読みください。

### Windows Server 2003 での Identity Synchronization for Windows の使用

Windows Server 2003 では、デフォルトのパスワードポリシーで強力なパスワードが要求されますが、これは Windows 2000 におけるデフォルトのパスワードポリシーと異なります。

## Directory Server の修正されたバグと既知の問題点

---

この章では、Directory Server のリリース時点で判明している、製品固有の重要な情報を示します。

この章では、次の内容について説明します。

- 39 ページの「Directory Server 6.2 で修正されたバグ」
- 40 ページの「Directory Server の既知の問題点と制限事項」

### Directory Server 6.2 で修正されたバグ

この節では、Directory Server の前回のリリース以降に修正されたバグの一覧を示します。

- |         |   |
|---------|---|
| 6500297 | Solaris および Linux で ZIP 形式の配布パッケージからインストールすると、共通エージェントコンテナ (cacao) の再起動後に Directory Server が SNMP 経由で表示されません。 |
| 6509701 | パスワード変更の拡張操作を使用して LDAP パスワードを変更した場合、pwdSafeModify を off にしていても、アカウントの現在のパスワードが要求されます。                         |
| 6520653 | Windows 2003 システムでは、ZIP 形式の配布パッケージから dsee_deploy コマンドを使用してインストールされたソフトウェアをドイツ語のロケールで使用しないでください。               |
| 6540157 | db2ldif または ldif2db を実行後、新しい変更ログが作成されるが、古い変更ログが削除されません。   |
| 6558119 | レプリケーションが有効になっていると、ns-slapd はクラッシュします。  |
| 6561746 | Directory Server 5.1 マスターを 6.x に移行すると、エラーが表示されます。   |

- 6561772 lockhart にロードされている一部の jar ファイルは、125310-02 および 125278-02 パッチの適用後にアップグレードできなくなります。
- 6564778 dsconf create-plugin -Y pwdstoragescheme コマンドは、不正な DN を持つプラグインエントリを追加します。

## Directory Server の既知の問題点と制限事項

この節では、リリース時点での既知の問題点および制限事項の一覧を示します。

### Directory Server の制限事項

この節では、製品の制限事項の一覧を示します。

#### ファイルアクセス権を手作業で変更した場合の問題点

インストール済みの Directory Server Enterprise Edition 製品ファイルのアクセス権を変更すると、場合によってはソフトウェアが正常に動作しなくなる可能性があります。ファイルのアクセス権は、製品マニュアルの指示、または Sun サポートからの指示に従っている場合のみ変更してください。

この制限事項を回避するには、適切なユーザーアクセス権およびグループアクセス権を持つユーザーとして製品をインストールし、サーバーインスタンスを作成します。

#### cn=changelog サフィックスをレプリケートした場合の問題点

cn=changelog サフィックスのレプリケーションを設定することは可能ですが、実際に設定するとレプリケーションに干渉する可能性があります。cn=changelog サフィックスをレプリケートしないでください。cn=changelog サフィックスは、旧バージョン形式の変更ログのプラグインによって作成されます。

#### Sun Cluster 上でのフェイルオーバー後にデータベースキャッシュが古くなる場合がある

Sun Cluster 上で Directory Server を実行しているとき、共有されていないディレクトリを使用するように nsslapd-db-home-directory を設定すると、データベースキャッシュファイルが複数のインスタンスによって共有されます。フェイルオーバー後、新しいノード上の Directory Server インスタンスが、古くなっている可能性があるそのデータベースキャッシュファイルを使用します。

この制限に対処するには、共有ディレクトリを使用するように nsslapd-db-home-directory を設定するか、または Directory Server の起動時に nsslapd-db-home-directory 下のファイルが削除されるようにシステムを設定してください。

#### LD\_LIBRARY\_PATH に /usr/lib が含まれる場合に誤った SASL ライブラリがロードされる

LD\_LIBRARY\_PATH に /usr/lib が含まれている場合に、誤った SASL ライブラリが使用され、インストール後に dsadm コマンドが失敗する原因となります。

cn=config 属性の変更には LDAP の置換操作を使用する

cn=config に対する LDAP の変更操作では、置換サブ操作のみを使用できます。属性を追加または削除しようとする、操作は拒否され、エラー 53 (DSA is unwilling to perform) が返されます。Directory Server 5 では、属性または属性値の追加または削除が可能でしたが、値の検証を経ることなく dse.ldif ファイルに更新が適用され、DSA の内部状態は DSA を停止して再開するまで更新されませんでした。

---

注 - cn=config 設定インタフェースは非推奨となっています。可能な場合は、代わりに dsconf コマンドを使用してください。

---

この制限への対処として、追加または削除サブ操作の代わりに、LDAP の変更操作の置換サブ操作を代用することができます。機能面での支障は発生しません。また、変更後の DSA 設定の状態が予測しやすくなります。

Windows システムで Directory Server が Start TLS 操作をデフォルトで許可しないこの問題点は、Windows システム上のサーバーインスタンスのみに影響します。この問題の原因は、Start TLS 操作を使用するときの Windows システム上のパフォーマンスです。

この問題に対処するには、dsconf コマンドで -p オプションを指定し、SSL ポートを直接使用して接続することを検討してください。別の方法として、ネットワーク接続がすでにセキュリティー保護されている場合は、dsconf コマンドの -e オプションの使用を検討してください。このオプションにより、セキュリティー保護された接続を要求せずに標準ポートに接続できます。

存在しないサーバーをレプリケーション更新ベクトルが参照する場合があるレプリケートした Directory Server インスタンスをレプリケーショントポロジから削除したあとも、レプリケーション更新ベクトルがそのインスタンスへの参照を維持し続けることがあります。結果として、存在しなくなったインスタンスへのリフェラルが発生する可能性があります。

Common Agent Container がシステム起動時に開始しないこの問題点に対処するには、ネイティブパッケージからのインストール時に root 権限で cacaoadm enable コマンドを使用してください。

max-thread-per-connection-count が Windows システムで正しく機能しない Directory Server の設定プロパティ max-thread-per-connection-count は、Windows システムには適用されません。

Microsoft Windows のバグによりサービスのスタートアップの種類が無効と表示される

[Microsoft Windows 2000 Standard Edition のバグ](#)

(<http://support.microsoft.com/kb/287516/en-us>)が原因で、Microsoft 管理コンソールを使用して Directory Server サービスを削除したあとも、このサービスが「無効」として表示されます。

Windows XP 上で、Administrator アカウントで、webconsole にログインできない  
Windows XP 上で実行している webconsole に Administrator アカウントでログインできません。

この問題に対処するには、ゲストアカウントを無効にして、レジストリキー  
HKEY\_LOCAL\_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Control\Lsa\ForceGuest を 0 に設定してください。

### Directory Server 6.2 の既知の問題点

この節では、Directory Server 6.2 のリリース時に判明していた既知の問題点の一覧を示します。

- 2113177 オンラインでのエクスポート、バックアップ、復元、またはインデックス作成の実行中にサーバーを停止したときに Directory Server がクラッシュする現象が確認されています。
- 2133169 Directory Server で LDIF からエントリをインポートするときに、createTimeStamp 属性および modifyTimeStamp 属性が生成されません。
- LDIF インポートは高速化のために最適化されています。そのため、インポート処理ではこれらの属性を生成しません。この制限に対処するには、エントリをインポートする代わりに追加してください。インポートを実行する前に LDIF を前処理して属性を追加する対処策もあります。
- 4979319 Directory Server の一部のエラーメッセージで、実際には存在しない『Database Errors Guide』に言及しています。クリティカルなエラーメッセージの意味が理解できず、そのメッセージについての記述がドキュメントに存在しない場合は、Sun サポートまでお問い合わせください。
- 6358392 ソフトウェアを削除する場合、dsee\_deploy uninstall コマンドでは既存のサーバーインスタンスが停止または削除されません。
- この制限に対処するには、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.2 Installation Guide』の指示に従ってください。
- 6366948 Directory Server で、サプライヤレプリカ上で pwdFailureTime 属性の値をクリアしたあとも、コンシューマレプリカ上ではこの属性値が保持される現象が確認されています。userPassword の変更がレプリケートされたあとも、属性値は保持されたままです。
- 6401484 送信先サフィックスに対して SSL クライアント認証を使用するとき、dsconf accord-repl-agmt コマンドがレプリケーションアグリーメントの認証プロパティを整合できません。

この問題点に対処するには、次の手順に従って、サプライヤの証明書をコンシューマ上の設定に格納します。ここで示すコマンド例は、2つのインスタンスが同じホスト上にあることを前提としています。

1. 証明書をファイルにエクスポートします。

次の例は、`/local/supplier` および `/local/consumer` に位置するサーバーを対象にエクスポートを実行する方法を示しています。

```
$ dsadm show-cert -F der -o /tmp/supplier-cert.txt /local/supplier defaultCert
$ dsadm show-cert -F der -o /tmp/consumer-cert.txt /local/consumer defaultCert
```

2. クライアントとサプライヤの証明書を交換します。

次の例は、`/local/supplier` および `/local/consumer` に位置するサーバーを対象に交換を実行する方法を示しています。

```
$ dsadm add-cert --ca /local/consumer supplierCert /tmp/supplier-cert.txt
$ dsadm add-cert --ca /local/supplier consumerCert /tmp/consumer-cert.txt
```

3. コンシューマ上で SSL クライアントエントリを追加します。  
`usercertificate;binary` 属性に `supplierCert` 証明書を指定し、適切な `subjectDN` を指定します。
4. コンシューマ上でレプリケーションマネージャー DN を追加します。

```
$ dsconf set-suffix-prop suffix-dn repl-manager-bind-dn:entryDN
```

5. `/local/consumer/alias/certmap.conf` 内のルールを更新します。
6. `dsadm start` コマンドで両方のサーバーを再起動します。

6412131 複数バイト文字を含む証明書名は、`dsadm show-cert instance-path valid-multibyte-cert-name` コマンドの出力ではドットとして示されます。

6410741 Directory Service Control Center では、値を文字列としてソートします。そのため、Directory Service Control Center で数字をソートすると、それらの数字は文字列であるかのようにソートされます。

0、20、および 100 を昇順にソートすると、0、100、20 というリストが得られます。0、20、および 100 を降順にソートすると、20、100、0 というリストが得られます。

6415184 パスに複数バイト文字を含む Directory Server インスタンスが DSCC に作成されない、起動されない、またはその他の通常のタスクを実行できない可能性があります。

これらの問題の一部は、インスタンスの作成に使用された文字セットを使用することで解決できます。文字セットを設定するには、次のコマンドを実行します。

```
# cacaoadm list-params | grep java-flags
java-flags=-Xms4M -Xmx64M

# cacaoadm stop
# cacaoadm set-param java-flags="-Xms4M -Xmx64M -Dfile.encoding=utf-8"
# cacaoadm start
```

これらの問題を回避するには、インスタンスのパスに ASCII 文字のみを使用してください。

- 6416407 エスケープした引用符またはシングルエスケープしたコンマを含む ACI ターゲット DN を Directory Server が正しく解析できません。次の例に示す変更は構文エラーとなります。

```
dn:o=mary\red\doe,o=example.com
changetype:modify
add:aci
aci:(target="ldap:///o=mary\red\doe,o=example.com")
(targetattr="*)(version 3.0; acl "testQuotes";
allow (all) userdn ="ldap:///self");

dn:o=Example Company\, Inc.,dc=example,dc=com
changetype:modify
add:aci
aci:(target="ldap:///o=Example Company\, Inc.,dc=example,dc=com")
(targetattr="*)(version 3.0; acl "testComma";
allow (all) userdn ="ldap:///self");
```

ただし、エスケープしたコンマが2つ以上含まれる例は、正しく解析されることが確認されています。

- 6428448 dpconf コマンドを対話型モードで使用するとき、「「cn=Directory Manager」のパスワードを入力:」プロンプトが2回表示される現象が確認されています。
- 6443229 Directory Service Control Center では、PKCS#11 外部セキュリティーデバイスまたはトークンを管理できません。
- 6446318 Windows で、SASL 認証が次の2つの理由で失敗します。

- SASL 暗号化が使用されている。

SASL 暗号化によって生じる問題に対処するには、サーバーを停止し、dse.ldif を編集し、次のように SASL をリセットします。

```
dn: cn=SASL, cn=security, cn=config
dssaslminssf: 0
dssaslmaxssf: 0
```

- ネイティブパッケージを使用してインストールが実行された。

ネイティブパッケージのインストールによって生じる問題に対処するには、SASL\_PATH を *install-dir*\share\lib に設定します。

- 6448572 国名を指定すると、Directory Service Control Center による自己署名付き証明書の生成は失敗します。
- 6449828 Directory Service Control Center では、userCertificate バイナリ値が正しく表示されません。
- 6468074 設定属性 passwordRootdnMayBypassModsCheck を有効に設定したときに、別のユーザーのパスワードを変更するときのパスワード構文チェックをすべての管理者が回避できるようにサーバーの動作が変更されましたが、この属性の名前は実際の動作を正しく反映していません。
- 6468096 ZIP 形式の配布パッケージからインストールする前、または dsadm コマンドを使用する前に、LD\_LIBRARY\_PATH を設定しないでください。
- 6469154 Windows では、dsadm および dpadm コマンドによる出力とヘルプメッセージが、簡体字中国語および繁体字中国語にローカライズされていません。
- 6469296 既存のサーバーの設定をコピーできる Directory Service Control Center の機能を使用して、プラグイン設定をコピーすることはできません。
- 6469688 Windows システムで、LDIF ファイル名に 2 バイト文字が含まれる LDIF を dsconf コマンドでインポートしようとしたときに、インポートが失敗する現象が確認されています。
- この問題点に対処するには、2 バイト文字が含まれないように LDIF ファイル名を変更します。
- 6478568 dsadm enable-service コマンドが Sun Cluster に対して正しく機能しません。
- 6480753 Common Agent Container への Monitoring Framework コンポーネントの登録中に dsee\_deploy コマンドがハングアップする現象が確認されています。
- 6482378 ルート DSE の supportedSSLCiphers 属性に、サーバーで実際にはサポートされていない NULL 暗号化方式が表示されます。
- 6482888 Directory Server が最低でも 1 回起動されていないと、dsadm enable-service コマンドがシステム再起動時に Directory Server の再起動に失敗します。
- 6483290 Directory Service Control Center と dsconf コマンドのどちらを使用しても、無効なプラグイン署名を Directory Server が処理する方法を設定できません。

ん。デフォルトの動作では、プラグインの署名の検証は行われますが、署名が有効であることは要求されません。署名が無効な場合、Directory Server は警告をログに記録します。

サーバーの動作を変更するには、cn=config 上で ds-require-valid-plugin-signature 属性と ds-verify-valid-plugin-signature 属性を調整します。どちらの属性も、値 on または off を設定できます。

6485560 Directory Service Control Center では、別のサフィックスにリフェラルを返すように設定されたサフィックスを参照できません。

6488197 Windows システムでのインストール後およびサーバーインスタンス作成後は、インストールおよびサーバーインスタンスのフォルダに対するファイルアクセス権により、すべてのユーザーにアクセスが許可されません。

この問題点に対処するには、インストールおよびサーバーインスタンスのフォルダのアクセス権を変更します。

6490653 Internet Explorer 6 を使用して、Directory Service Control Center 上で Directory Server のリフェラルモードを有効にすると、リフェラルモードの確認ウィンドウが小さいために、テキストの一部が切れて表示されません。

この問題点に対処するには、Mozilla Web ブラウザなどの別のブラウザを使用します。

6490762 新しい証明書を作成または追加したあと、変更を有効にするために Directory Server を再起動する必要があります。

6491849 レプリカをアップグレードし、新しいシステムにサーバーを移動したあと、新しいホスト名を使用するレプリケーションアグリーメントを再作成する必要があります。Directory Service Control Center では、既存のレプリケーションアグリーメントを削除できますが、新規アグリーメントを作成することはできません。

6492894 Red Hat システムでは、dsadm autostart コマンドによって、ブート時に確実にサーバーインスタンスが起動されるとは限りません。

6494997 DSML を設定している場合、dsconf コマンドは、適切な dsSearchBaseDN 設定を要求しません。

6495004 Windows システムでは、インスタンスの basename が ds である場合、Directory Server が起動に失敗する現象が確認されています。

6497053 ZIP 形式の配布パッケージからインストールする場合、dsee\_deploy コマンドでは、SNMP およびストリームアダプタポートを設定するためのオプションが提供されません。

この問題に対処するには、

1. Web コンソールまたは `dpconf` を使用して、監視プラグインを有効にします。
2. `cacaoadm set-param` を使用して、`snmp-adaptor-port`、`snmp-adaptor-trap-port`、および `commandstream-adaptor-port` を変更します。

- 6497894 `dsconf help-properties` コマンドは、インスタンス作成後にのみ正しく機能するように設定されています。また、オンラインマニュアルで、`dsml-client-auth-mode` コマンドのデフォルト値が間違っ記述されています。正しい値のリストは `client-cert-first | http-basic-only | client-cert-only` です。
- 6498537 Windows XP システムで Directory Service Control Center を使用するには、ゲストアカウントを無効にする必要があります。さらに、認証を成功させるには、レジストリキー `HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Control\Lsa\ForceGuest` を 0 に設定する必要があります。
- 6500936 ネイティブパッチ配布では、アクセスログのフィルタリング用の日付選択に使用するミニチュアカレンダーが、繁体字中国語に正しくローカライズされていません。
- 6501893 `schema_push`、`repldisc`、`pwdhash`、`ns-inactivate`、`ns-activate`、`ns-accountstatus`、`mldif`、`insync`、`fildif`、`entrycmp`、`dsrepair`、`dsee_deploy`、`dsadm show-cert`、`dsadm repack`、および `ldif` コマンドの出力がローカライズされていません。
- 6501900
- 6501902
- 6501904 `dscmmon`、`dsccreg`、`dscctest`、および `dsccreg` コマンドによって表示される一部の出力がローカライズされていません。
- 6503546 システムのロケールを変更してから DSCC を起動しても、ポップアップウィンドウのメッセージが選択したロケールで表示されません。
- 6503558 英語以外のロケールで Directory Service Control Center を設定する場合、Directory Service Control Center Registry の作成に関するログメッセージは完全にローカライズされていません。一部のログメッセージは、Directory Service Control Center の設定時に使用されたロケールで表示されます。
- 6504180 DSCC 上で、Directory Manager DN に複数バイト文字を指定して作成したインスタンスは、パスワード確認に失敗するため起動されません。

- 6520646 Internet Explorer を使用しているときに「Directory Service Control Center オンラインヘルプの参照」をクリックしても、オンラインヘルプが表示されません。
- 6527999 Directory Server のプラグイン API には、`slapi_value_init()`、`slapi_value_init_string()`、および `slapi_value_init_berval()` 関数が含まれています。
- これらすべての関数が内部要素をリリースするためには「done」関数が必要になります。しかし、パブリック API に `slapi_value_done()` 関数がありません。
- 6533281 既知の問題点により、Windows インストールの `nsslapd-idletimeout` は、すべての条件下でドキュメントに記載されているとおりに計算されるわけではありません。
- Unix (Solaris を含む) では、ドキュメントに記載されているように、`nsslapd-idletimeout` は新しい接続が開かれたとき、および新しいデータが受信されたときに計算されます。
- Windows では、`nsslapd-idletimeout` は接続がセキュリティー保護されている場合、または `ds-start-tls-enabled` が `true` の場合は同じように計算されます。ただし、接続がセキュリティー保護されていない場合と、`ds-start-tls-enabled` が `false` の場合は、`nsslapd-idletimeout` は新しい接続が開かれたときのみ計算されます。
- 6536770 インターネットサービスプロバイダにより設定されている制限によっては、DSCC に長い ACI が表示されないことがあります。
- 6538726 Linux では、Directory Server インスタンスが、そのインスタンスの作成されたロケールとは異なるロケールで起動されると、複数バイト文字が正しく表示されません。
- 6542857 Solaris 10 で Service Management Facility (SMF) を使用してサーバーインスタンスを有効にした場合、システムをリブートしてもインスタンスが起動しないことがあります。

この問題を回避するには、次に示す + でマークされた行を `/opt/SUNWdsee/ds6/install/tmpl_smf.manifest` に追加します。

```
...
restart_on="none" type="service">
<service_fmri value="svc:/network/initial:default"/>
  </dependency>
+ <dependency name="nameservice" grouping="require_all" \
+ restart_on="none" type="service">
+ <service_fmri value="svc:/milestone/name-services"/>
+ </dependency>
```

- ```
<exec_method type="method" name="start"
exec="%%INSTALL_PATH%%/bin/dsadm start --exec %sunds/path}"...
```
- 6547923 Directory Server Enterprise Edition Windows サービスは、システムの再起動時に複数のサーバーインスタンスの起動に失敗します。
- 6550543 DSCC が Tomcat 5.5 および JDK 1.6 とともに使用されている場合、エラーが発生する可能性があります。
- この問題を回避するには、代わりに JDK 1.5 を使用します。
- 6551672 Solaris 10 にバンドルされている Sun Java System Application Server では、認証メカニズム用の SASL クライアント接続を作成できないので、共通エージェントコンテナと通信できません。
- この問題を回避するには、  
*appserver-install-path/appserver/config/asenv.conf* ファイルを編集して、*AS\_JAVA* エントリを *AS\_JAVA="/usr/java"* に置き換えることで、アプリケーションサーバーによって使用される JVM を変更します。アプリケーションサーバーのドメインを再起動します。
- 6551685 *dsadm autostart* によって、システムのリポート時にネイティブの LDAP 認証が失敗することがあります。
- この問題を回避するには、リポートスクリプトの順序を逆にします。デフォルトの順序は */etc/rc2.d/S71ldap.client* および */etc/rc2.d/S72dsee\_directory* です。
- 6554777 アプリケーションサーバーに Web Archive (WAR) ファイルを配備して、DSCC を設定した場合、DSCC の「バージョン」ウィンドウに HTML ソースコードが表示される可能性があります。この問題を回避するには、*domain-path/domain-name/config/default-web.xml* に次のエントリを追加します。
- ```
<mime-mapping>
<extension>shtml</extension>
<mime-type>text/html</mime-type>
</mime-mapping>
```
- 6555192 英語以外の言語で、DSCC を利用している場合、進行状況ウィンドウに表示されるローカライズされたサーバーメッセージに含まれる複数バイト文字が、文字化けして表示されることがあります。
- 6557480 Web Archive (WAR) ファイルを使用して構成された DSCC 上でオンラインヘルプにアクセスすると、エラーが表示されます。
- 6565893 *idsktune* コマンドは、SuSE Enterprise Linux をサポートしていません。

- 6571672 システムで解凍機能が利用できない場合、dsee\_deploy はどの製品もインストールしません。
- 6573439 インスタンスの「詳細な表示オプション」で、「アクセスログ」タブ、「エラーログ」タブ、および「監査ログ」タブの日付がローカライズされていません。
- 6573440 Directory Server の複数の属性で一意性プラグインを使用できるように設定すると、Directory Server の起動時にエラーが表示されます。
- 6577314 サーバーインスタンスを停止せずに Directory Server Enterprise Edition 6.2 パッチを適用すると、dsadm info および dsadm stop は、サーバーの実行中にサーバーがダウンしていることを示します。
- 6581469 韓国語および簡体字中国語のメッセージの一部で、文字列 err= が翻訳されていません。
- 6582831 Solaris で、システムの再起動後、サービスとして登録されているインスタンスが起動しないことがあります。
- この問題を回避するには、次のコマンドを実行します。
- ```
# /usr/sbin/svccfg
svc:> select application/sun/ds
svc:/application/sun/ds> delpropvalue start/timeout_seconds 60
svc:/application/sun/ds> delpropvalue stop/timeout_seconds 60
svc:/application/sun/ds> addpropvalue start/timeout_seconds 600
svc:/application/sun/ds> addpropvalue stop/timeout_seconds 600
svc:/application/sun/ds> quit
```
- 6586231 dsconf のフランス語のヘルプで、Directory Server が serveur d'annuaire ではなく、répertoire と誤訳されていることがあります。
- 6588319 Tomcat サーバーで構成された DSCC で、「ヘルプ」および「バージョン」ポップアップウィンドウのタイトルに含まれる複数バイト文字が文字化けしています。
- 6589603 構成プロパティ (pwd-max-history-count) またはパスワードポリシー属性 (pwdInHistory) を上限値である 24 に設定すると、Directory Server インスタンスがクラッシュすることがあります。
- この問題を回避するには、pwd-max-history-count または pwdInHistory を 23 以下の値にする必要があります。
- 6589942 フランス語、ドイツ語、およびスペイン語で、dsconf enable-repl -? コマンド構文の ROLE は翻訳されているが、後出の ROLE = master 文字列では翻訳されていません。
- 6589949 コマンド行インタフェースのヘルプで、INSTANCE\_PATH がドイツ語およびスペイン語に翻訳されていません。

- 6590558 Linux で、`/etc/security/limits.conf` ファイルにファイルの最大数が指定されていると、システム再起動時に Directory Server インスタンスが起動しません。
- この問題を回避するには、`etc/init.d/dsee_directory` ファイルに次の行を追加します。
- ```
# ulimit -Hn 65536
# ulimit -Sn 65536
```
- 6592543 フランス語のロケールで、サーバーの停止または登録解除を確認するポップアップウィンドウに重複したアポストロフィーが表示されます。



# Directory Proxy Server の修正されたバグと既知の問題点

---

この章では、Directory Proxy Server のリリース時点で判明している、製品固有の重要な情報を示します。

この章では、次の内容について説明します。

- [53 ページの「Directory Proxy Server 6.2 で修正されたバグ」](#)
- [53 ページの「Directory Proxy Server の既知の問題点と制限事項」](#)

## Directory Proxy Server 6.2 で修正されたバグ

この節では、Directory Proxy Server の前回のリリース以降に修正されたバグの一覧を示します。

- 6554303 `filter-join-rule` を使用して結合データビューを設定した場合、二次データビュー上で変換規則を設定したあとも、結合データビューにエントリーを追加することができません。
- 6557516 結合データビューの検索を中断したあと、Directory Proxy Server が無限にループします。
- 6563993 JDBC データビューでの検索において、検索条件に一致するエントリーが返されなかった場合、Directory Proxy Server は結果コードを 32 として返してはいけません。

## Directory Proxy Server の既知の問題点と制限事項

この節では、リリース時点での既知の問題点および制限事項の一覧を示します。

### Directory Proxy Server の制限事項

この節では、製品の制限事項の一覧を示します。

#### ファイルアクセス権を手作業で変更した場合の問題点

インストール済みの Directory Server Enterprise Edition 製品ファイルのアクセス権を変更すると、場合によってはソフトウェアが正常に動作しなくなる可能性があります。ファイルのアクセス権は、製品マニュアルの指示、または Sun サポートからの指示に従っている場合のみ変更してください。

この制限事項を回避するには、適切なユーザーアクセス権およびグループアクセス権を持つユーザーとして製品をインストールし、サーバーインスタンスを作成します。

#### 自己署名サーバー証明書を更新できない

自己署名サーバー証明書を作成するときは必ず、その証明書を更新する必要がないように、十分な長さの有効期限を指定するようにしてください。

### Directory Proxy Server 6.2 の既知の問題点

この節では、Directory Proxy Server 6.2 のリリース時に判明していた既知の問題点の一覧を示します。

- 5042517 DN 変更操作が、LDIF、JDBC、結合、およびアクセス制御データビューに対してサポートされていません。
- 6255952 ローカルプロキシの ACI を定義する場合、実行権限取得制御を使用した操作で正しい情報が返されない可能性があります。
- 6356465 Directory Proxy Server で、(targetattr = "locality;lang-fr-ca") のようにターゲット属性へのサブタイプを指定する ACI が拒否される現象が確認されています。
- 6357160 dpconf コマンドは、プロパティ値に含まれている復帰改行文字を拒否しません。プロパティ値を設定するときは、復帰改行文字を使用しないでください。
- 6359601 ACI の設定時に、Directory Proxy Server が返す結果が LDAP データソースに対する直接検索の結果と一致しない現象が確認されています。
- 6360059 Directory Proxy Server では、データソース接続の失敗後に復元された JDBC データソース接続を再開できません。Directory Proxy Server が接続を再開できるのは、Directory Proxy Server インスタンスの再起動後のみです。
- 6374344 Directory Server データソースを再起動したあと、サーバーでバインド応答を読み取ることができないという操作エラーが Directory Proxy Server から返される現象が確認されています。
- 6383532 認証モードの設定を変更したときは、Directory Proxy Server を再起動する必要があります。

- 6386073 認証局によって署名された証明書の要求が Directory Proxy Server に対して生成されたあとで、Directory Service Control Center を更新することができます。そのとき、Directory Service Control Center は証明書に自己署名済みのラベルを付けます。
- 6388022 クライアントアプリケーションが SSL を使用して接続するとき、SSL 接続を使用するように設定することができます。Directory Proxy Server によって使用される SSL ポートが正しくない場合に、セキュリティー保護された検索のあとで Directory Proxy Server がすべての接続を閉じる現象が確認されています。
- 6390118 プロキシ認証ではなくクライアントアプリケーション証明書に基づく認証を使用するように設定されたとき、Directory Proxy Server がリフェラルホップ数を正確にカウントできません。
- 6390220 Directory Proxy Server でデータビューの base-dn プロパティをルート DN ("") に設定できるのは、データビューの初回作成時に限られます。
- 6410741 Directory Service Control Center では、値を文字列としてソートします。そのため、Directory Service Control Center で数字をソートすると、それらの数字は文字列であるかのようにソートされます。
- 0、20、および 100 を昇順にソートすると、0、100、20 というリストが得られます。0、20、および 100 を降順にソートすると、20、100、0 というリストが得られます。
- 6415184 パスに複数バイト文字を含む Directory Proxy Server インスタンスが DSCC に作成されない、起動されない、またはその他の通常のタスクを実行できない可能性があります。
- これらの問題の一部は、インスタンスの作成に使用された文字セットを使用することで解決できます。文字セットを設定するには、次のコマンドを実行します。
- ```
# cacaoadm list-params | grep java-flags
java-flags=-Xms4M -Xmx64M

# cacaoadm stop
# cacaoadm set-param java-flags="-Xms4M -Xmx64M -Dfile.encoding=utf-8"
# cacaoadm start
```
- これらの問題を回避するには、インスタンスのパスに ASCII 文字のみを使用してください。
- 6439055 属性ルールを定義するときは、ドル記号 (\$) を使用しないでください。
- 6439604 アラートを設定したあと、変更を有効にするには Directory Proxy Server を再起動する必要があります。

- 6461510 Directory Proxy Server では、リフェラルのホップ制限が機能しません。
- 6447554 Directory Proxy Server で、数値形式または辞書形式のデータ配布を設定したときに、別のデータビューに移動するエントリの名前変更に失敗する現象が確認されています。
- 6458935 結合データビューを操作する場合、Directory Proxy Server は、その結合を構成するビューのデータ配布アルゴリズムを使用しません。
- この問題点に対処するには、結合とデータ配布を一緒に使用するとき、結合データビューのレベルでデータ配布を設定します。
- 6463067 ネイティブパッケージからソフトウェアをインストールし、インストール時にネイティブパッケージの位置を変更した場合、`dpadm autostart` コマンドは機能しません。
- 6469154 Windows では、`dsadm` および `dpadm` コマンドによる出力とヘルプメッセージが、簡体字中国語および繁体字中国語にローカライズされていません。
- 6469780 JDBC データソースを設定したあと、変更を有効にするには Directory Proxy Server を再起動する必要があります。
- 6475710 RDN 変更操作は、JDBC データビュー内のエントリに対してサポートされていません。
- 6479766 Directory Proxy Server では、LDAP によってスキーマを管理することはできません。
- 6486578 Directory Proxy Server は、一次テーブルで使用されている `filter-join-rule` プロパティを無視するべきです。
- 6488197 Windows システムでのインストール後およびサーバーインスタンス作成後は、インストールおよびサーバーインスタンスのフォルダに対するファイルアクセス権により、すべてのユーザーにアクセスが許可されません。
- この問題点に対処するには、インストールおよびサーバーインスタンスのフォルダのアクセス権を変更します。
- 6488297 Windows では、DSCC の初期化は Administrator ユーザーしか実行できません。
- 6490763 Directory Proxy Server を介して Directory Server にアクセスしている場合、Directory Server の再起動後に、Access Manager で持続検索に関連したキャッシュの問題が発生する現象が確認されています。
- この問題点に対処するには、Directory Server を再起動したあと、Access Manager または Directory Proxy Server を再起動します。

さらに細かいチューニングとして、Access Manager の試行の数や試行の間の遅延時間を増やして、持続検索の接続を再確立できます。これらのパラメータは、AMConfig.properties ファイル内の次のプロパティを変更することによって増やすことができます。

- 試行の回数を表す `com.ipplanet.am.event.connection.num.retries` を増やします。デフォルトは3回の試行です。
- 試行の間の遅延時間(ミリ秒)を表す `com.ipplanet.am.event.connection.delay.between.retries` を増やします。デフォルトは3000ミリ秒です。

6490853 DB2 データベースによって設定された JDBC データビューを使用して検索を実行し、検索結果として非常に多くの数のエントリが返された場合、1344 個のエントリを返したあとにエラーが発生することがあります。

この制限を克服するには、CLI/ODBC 設定キーワード `CLIPkg` の値を 30 に設定することで、大きなパッケージの数を増やします。その場合でも、検索結果の最大数は 11712 エントリに制限されます。

詳細については、[DB2 のマニュアル](#)を参照してください。

6491133 Directory Service Control Center を使用して自己署名付き証明書を作成する場合、証明書名に複数バイト文字を使用しないでください。

6491845 Directory Proxy Server で許可されているデフォルトの LDAP コントロールは、Directory Service Control Center では表示されません。

6492376 JDBC 構文を設定したあと、変更を有効にするには Directory Proxy Server を再起動する必要があります。

6493349 Directory Service Control Center は、既存の除外されたサブツリーまたは代替検索ベースの DN を変更するときにコンマを削除します。

6494540 セキュリティー保護されていない LDAP アクセスをはじめて有効または無効にしたあと、変更を有効にするには Directory Proxy Server を再起動する必要があります。

6495395 `split` を使用した仮想ディレクトリマクロが正しく機能しません。

6497547 制限時間とサイズ制限の設定は、LDAP データソースでのみ機能します。

6497992 コマンド `dpadm set -flags cert-pwd-store=off` を使用したあと、Directory Service Control Center を使用して Directory Proxy Server を再起動できません。

- 6500298 dpadm コマンドの `jvm-args` フラグを使用し、サーバーを再起動した場合、Java 仮想マシンに 2G バイトを超えるメモリーを正常に割り当てることができません。
- この問題点に対処するには、`dpadm restart` の代わりに、`dpadm stop` と `dpadm start` を使用します。
- 6501867 ASCII 文字と複数バイト文字の両方を組み合わせたサーバーインスタンス名とともに `dpadm start` コマンドを使用した場合に失敗する現象が確認されています。
- 6505112 既存の接続ハンドラに `data-view-routing-custom-list` プロパティーを設定する場合、エスケープが必要な文字 (コンマなど) を含むデータビュー名を使用するとエラーが発生します。
- この問題点に対処するには、エスケープが必要な文字を含むデータビュー名を指定しないでください。たとえば、DN を含むデータビュー名を使用しないでください。
- 6510583 以前のバージョンとは異なり、マニュアルページ `allowed-ldap-controls(5dpconf)` で説明されているように、デフォルトでは Directory Proxy Server でサーバー側ソートコントロールはできません。
- Directory Proxy Server でのサーバー側ソートコントロールのサポートは、`allowed-ldap-controls` プロパティーで指定される許可された LDAP コントロールのリストに `server-side-sorting` を追加することによって、有効にできます。
- ```
$ dpconf set-server-prop \  
  allowed-ldap-controls:auth-request \  
  allowed-ldap-controls:chaining-loop-detection \  
  allowed-ldap-controls:manage-dsa \  
  allowed-ldap-controls:persistent-search \  
  allowed-ldap-controls:proxy-auth-v1 \  
  allowed-ldap-controls:proxy-auth-v2 \  
  allowed-ldap-controls:real-attributes-only \  
  allowed-ldap-controls:server-side-sorting
```
- 既存の設定値もあわせて設定する必要があることに注意してください。そうしないと、サーバー側ソートコントロールのみが許可されます。
- 6511264 Directory Proxy Server の DN 名前変更機能を使用する際に、同じ DN コンポーネントが繰り返し登場する場合は、それらは一括して変更されることに注意してください。
- たとえば、`o=myCompany.com` で終わる DN の名前を、`dc=com` で終わるように変更する場合を考えてみます。たとえば

uid=userid,ou=people,o=myCompany.com,o=myCompany.com のようにコンポーネント o=myCompany.com が繰り返されている場合、名前が変更された結果、DN は uid=userid,ou=people,dc=com となり、uid=userid,ou=people,o=myCompany.com,dc=com とはなりません。

6517615 Directory Proxy Server を介して Oracle 9 にアクセスするための JDBC 接続を行う際に、マニュアルに記載されている手順だけでは、設定できない場合があります。

次の設定を考えてみます。ホスト myhost、ポート 1537 で待機している Oracle 9 サーバーがあるとします。インスタンスのシステム識別子 (SID) は MYINST です。このインスタンスには、データベース MYNAME.MYTABLE が含まれています。

一般的には、MYTABLE へのアクセスを設定するには、次のプロパティを設定します。

- JDBC データソースで、db-name:MYINST を設定します。
- JDBC データソースで、db-URL:jdbc:oracle:thin:myhost:1537: を設定します。
- JDBC テーブルで、sql-table:MYNAME.MYTABLE を設定します。

ここまでの設定で機能しない場合は、さらに次のように MYTABLE へのアクセスを設定してみてください。

- JDBC データソースで、db-name:(CONNECT\_DATA=(SERVICE\_NAME=MYINST)) を設定します。
- JDBC データソースで、db-url:jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=(ADDRESS\_LIST=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=myhost)(PORT=1537))) を設定します。
- JDBC テーブルで、sql-table:MYNAME.MYTABLE を設定します。

6527010 Directory Proxy Server は、テーブル間の多対多 (N:N) の関係を意味する JDBC 属性を JDBC データベースに書き込むことができません。

6527869 検索フィルタで二次ビューの属性を使用すると、結合ビューでの検索が正常に行えません。

6539650 複数バイトの DN を持ち DSCC を使用して作成された Directory Proxy Server インスタンスは、Linux 上では起動できません。

6542857 Solaris 10 で Service Management Facility (SMF) を使用してサーバーインスタンスを有効にした場合、システムをリブートしてもインスタンスが起動しないことがあります。

この問題を回避するには、次に示す + でマークされた行を /opt/SUNWdsee/ds6/install/tmpl\_smf.manifest に追加します。

```

...
restart_on="none" type="service">
<service_fmri value="svc:/network/initial:default"/>
  </dependency>
+ <dependency name="nameservice" grouping="require_all" \
+ restart_on="none" type="service">
+ <service_fmri value="svc:/milestone/name-services"/>
+ </dependency>
<exec_method type="method" name="start"
exec="%%INSTALL_PATH%%/bin/dsadm start --exec %sunds/path"...

```

- 6551076 マシンに複数のホスト名がある場合、コンソールは Directory Proxy Server インスタンスのバックエンド状態を取得しません。
- 6555192 英語以外の言語で、DSCC を利用している場合、進行状況ウィンドウに表示されるローカライズされたサーバーメッセージに含まれる複数バイト文字が、文字化けして表示されることがあります。
- 6565106 RDBMS テーブルに、JDBC オブジェクトクラスの DN パターンに一致する重複エントリがある場合、JDBC データビューに対して検索が実行されると、重複サブツリー (リーフ以外) のノードが Directory Proxy Server によって返されます。たとえば、JDBC オブジェクトクラスに ou という DN パターンがあり、JDBC 属性 ou にマッピングされた RDBMS の列に重複エントリ (たとえば sales) がある場合、検索結果には ou=sales といったノードが重複して表示されます。
- この問題を回避するには、次の手順を実行します。
1. 重複エントリが作成されないように、ou JDBC 属性にマッピングされた列を含むテーブルから値を取り除き、RDBMS ビューを作成します。
  2. RDBMS テーブル名を、DN パターン ou を含む JDBC オブジェクトクラスの RDBMS ビュー名に置換します。ただし、RDBMS ビューは読み取り専用なので、Directory Proxy Server を通じて JDBC 属性 ou に値を追加できないという制限があります。
- 6565893 idsktune コマンドは、SuSE Enterprise Linux をサポートしていません。
- 6573439 インスタンスの「詳細な表示オプション」で、「アクセスログ」タブ、「エラーログ」タブ、および「監査ログ」タブの日付がローカライズされていません。
- 6581469 韓国語および簡体字中国語のメッセージの一部で、文字列 err= が翻訳されていません。
- 6588319 Tomcat サーバーで構成された DSCC で、「ヘルプ」および「バージョン」ポップアップウィンドウのタイトルに含まれる複数バイト文字が文字化けしています。

- 6590460 Solaris 9 x86 で、`dpadm show-cert dps-instance-path` コマンドの出力で、文字列 `owner` が簡体字中国語および繁体字中国語に翻訳されていません。
- 6592543 フランス語のロケールで、サーバーの停止または登録解除を確認するポップアップウィンドウに重複したアポストロフィーが表示されます。



# Identity Synchronization for Windows の修正されたバグと既知の問題点

---

この章では、Identity Synchronization for Windows のリリース時点で判明している、製品固有の重要な情報を示します。

この章では、次の内容について説明します。

- 63 ページの「Identity Synchronization for Windows で修正されたバグ」
- 65 ページの「Identity Synchronization for Windows の既知の問題点と制限事項」

## Identity Synchronization for Windows で修正されたバグ

この節では、Identity Synchronization for Windows の前回のリリース以降に修正されたバグの一覧を示します。

- 6203357 Identity Synchronization for Windows は、Active Directory と Directory Server 間のグループ同期をサポートする必要があります。
- 6255331 LDAP データベースの設定でサブサフィックス連鎖を有効にした場合、連鎖されるデータベースのレコードを Identity Synchronization for Windows を使用して変更することはできません。ユーザーは連鎖されたデータベース内のエントリの作成と削除のみを行うことができます。作成、削除、更新を含むすべての操作は、プラグインがロードされていない場合に可能です。
- 6306868 フェイルオーバー設定における二次フェイルオーバーサーバーは、サーバーを設定するための `o=NetscapeRoot DIT` を持つ必要があります。
- 6308208 マルチマスターレプリケーションの設定で複数ホストオプションを指定すると、コマンド `prepds` がエラーを返します。その結果、ユーザーはマルチマスターレプリケーション設定を実行できません。
- 6312235 Identity Synchronization for Windows をインストールするときの TO DO リストで、サポート対象プラットフォームの一覧から Linux についての情報が欠落しています。

- 6331112 アカウントのロックアウトおよびアクティブ化の同期が、新しいパスワードポリシー属性を使用して実行されません。
- 6332185 Active Directory と Directory Server 間の同期のための、実装されているべきグループタイプマッピングが未実装です。
- 6332186 Identity Synchronization for Windows で、グループのユーザー名属性が正しくマップされません。
- 6332189 Identity Synchronization for Windows で、グループおよびグループメンバーが同じ SUL に属するかどうかのチェックが行われません。
- 6332300 一次マスターがダウンしているときに、Identity Synchronization for Windows がユーザーの作成、変更、および削除を二次マスターから Windows Active Directory に同期できません。
- 6332912 Identity Synchronization for Windows が、ユーザーの作成、変更、または削除を Directory Server から Active Directory に同期しません。この問題は、一次ホストと、二次ホストのリスト内の N 番目の二次ホストがダウンしているときに発生します。
- 6333957 管理ユーザーが使用されなくなったため、Identity Synchronization for Windows によって作成される管理ユーザーは不要です。uid=admin ユーザーの作成を削除してください。
- 6333958 Directory Server コンソールにアクセスするためにディレクトリ情報ツリーをクリックすると、Identity Synchronization for Windows がエラーを返します。
- 6334706 Directory Server プラグインの設定オプションが選択されていないときでも、Identity Synchronization for Windows インストーラが Directory Server の再起動を要求します。
- 6337005 Identity Synchronization for Windows のコマンド行使用例で、リンクユーザーを参照していますがこれは誤りです。
- 6339416 アンインストールプログラムで、手動による管理サーバーのアンインストールをユーザーに促すべきですが、実際にはそのように動作しません。
- 6339420 Identity Synchronization for Windows インストーラによってインストールされるコンポーネントの一覧から管理サーバーが欠落しています。
- 6388815 入れ子のグループの同期は現時点でサポートされていないため、そのような同期を実行しようとする Active Directory コネクタおよび Directory Server コネクタがクラッシュします。
- 6563860 Linux では、管理サーバーを Identity Synchronization for Windows と一緒にインストールすると、管理サーバーの構成に失敗し、起動しません。

6574937 Linux で、Directory Server および Active Directory ソース間の SSL モードで `resync` コマンドを実行しても失敗に終わります。

## Identity Synchronization for Windows の既知の問題点と制限事項

この節では、リリース時点での既知の問題点および制限事項の一覧を示します。

### Identity Synchronization for Windows の制限事項

この節では、製品の制限事項の一覧を示します。制限事項には、必ずしもバグ ID が関連付けられるわけではありません。

Identity Synchronization for Windows を正しくインストールするためには、`sun-sasl-2.19-4.i386.rpm` が必要です。

Linux では、Identity Synchronization for Windows をインストールする前に、お使いのシステム上に `sun-sasl-2.19-4.i386.rpm` パッケージがインストールされていることを確認してください。このパッケージがインストールされていないと、Identity Synchronization for Windows のインストールは失敗します。SASL パッケージは、JES 5 以降の配布パッケージの共有コンポーネントから取得できます。

### ファイルアクセス権を手作業で変更した場合の問題点

インストール済みの Directory Server Enterprise Edition 製品ファイルのアクセス権を変更すると、場合によってはソフトウェアが正常に動作しなくなる可能性があります。

この制限事項に対処するには、適切なユーザーアクセス権およびグループアクセス権を持つユーザーとして製品をインストールします。

Identity Synchronization for Windows コアサービスのフェイルオーバーが行われない  
Identity Synchronization for Windows コアサービスがインストールされたシステムを失った場合、システムを再インストールする必要があります。Identity Synchronization for Windows コアサービスのフェイルオーバーはありません。

`ou=services` (Identity Synchronization for Windows DIT の設定ブランチ) を LDIF 形式でバックアップし、Identity Synchronization for Windows の再インストール中にこの情報を使用してください。

### Windows 2003 SP1 での認証動作の変更

Windows 2003 SP1 をインストールした場合、デフォルトでは、ユーザーは旧パスワードを使用して自分のアカウントに 1 時間アクセスできます。

その結果、ユーザーが Active Directory で自分のパスワードを変更すると、オンデマンド同期属性 `dspsvalidate` は `true` に設定され、旧パスワードが Directory Server への認証に使用できます。それにより、Directory Server で同期されるパスワードは、現在の Active Directory パスワードではなく、以前の旧パスワードになります。

この機能を無効にする方法の詳細は、[Microsoft Windows サポートマニュアル \(http://support.microsoft.com/?kbid=906305\)](http://support.microsoft.com/?kbid=906305)を参照してください。

管理サーバーを削除する前に `serverroot.conf` の削除が必要  
管理サーバーを正常にアンインストールするには、管理サーバーのパッケージを削除する前に `/etc/mps/admin/v5.2/shared/config/serverroot.conf` を削除してください。

#### システムまたはアプリケーション障害時のデータ回復の実行

ハードウェアまたはアプリケーションで障害が発生したあと、同期されたディレクトリソースの一部にあるバックアップからデータを回復しなければならない場合があります。

ただし、データ回復の完了後、同期を通常どおり進行できることを保証するために、追加の手順を実行する必要があります。

コネクタは通常、メッセージキューに伝播された最後の変更についての情報を維持します。

コネクタ状態と呼ばれるこの情報は、コネクタがそのディレクトリソースから読み出す必要がある後続の変更を特定するために使用されます。同期されるディレクトリソースのデータベースがバックアップから復元される場合、コネクタ状態がすでに有効でなくなっている可能性があります。

Active Directory および Windows NT 用の Windows ベースのコネクタも内部データベースを維持します。データベースは、同期されるデータソースのコピーです。このデータベースは、接続されたデータソースのどの部分に変更されたかを特定するために使用されます。接続された Windows ソースがバックアップから復元された時点で、内部データベースは有効ではなくなります。

一般に、回復されたデータソースを再読み込みする目的には `idsync resync` コマンドを使用できます。

---

注-パスワードを同期する目的には、1つの例外を除いて再同期は使用できません。Directory Server 内のパスワードを無効にするために、`-i ALL_USERS` オプションを使用できます。これは、再同期データソースが Windows の場合に可能な方法です。また、SUL リストには Active Directory システムのみを含める必要があります。

---

ただし、すべての状況で `idsync resync` コマンドを使用できるとは限りません。



---

注意-次に説明する手順のいずれかを実行する前に、同期が停止していることを確認してください。

---

## 双方向の同期

同期設定に応じて、適切な修飾子設定を指定して `idsync resync` コマンドを使用します。`resync` 操作のターゲットとしては、回復されるディレクトリソースを使用します。

## 単方向の同期

回復されるデータソースが同期の送信先である場合、双方向の同期のときと同じ手順に従うことができます。

回復されるデータソースが同期のソースである場合、回復されるディレクトリソースの再読み込みには引き続き `idsync resync` を使用できます。Identity Synchronization for Windows の設定で、同期フローの設定を変更する必要はありません。`idsync resync` コマンドでは、`-o Windows|Sun` オプションを使用して、設定されたフローとは無関係に同期フローを設定することができます。

例として、次のシナリオを考えます。

Directory Server と Active Directory の間で、双方向の同期が設定されています。

- Microsoft Active Directory サーバーのデータベースを、バックアップから回復する必要があります。
- Identity Synchronization for Windows では、この Active Directory ソースは SUL AD に対して設定されます。
- 変更、作成、および削除の双方向同期は、この Active Directory ソースと Sun Directory Server ソースの間で設定されます。

## ▼ 単方向の同期を実行するには

- 1 同期を停止します。

```
idsync stopsync -w - -q -
```

- 2 **Active Directory** ソースを再同期します。また、変更、作成、および削除を再同期します。

```
idsync resync -c -x -o Sun -l AD -w - -q -
```

- 3 同期を再開します。

```
idsync startsync -w - -q -
```

## ディレクトリソース固有の回復手順

以降の手順は、特定のディレクトリソースに対応します。

## Microsoft Active Directory

Active Directory をバックアップから復元できる場合は、双方向または単方向の同期について説明した節の手順に従います。

ただし、重大な障害が発生したあとは、使用するドメインコントローラの変更が必要になる場合があります。この場合、Active Directory コネクタの設定を更新するため、次の手順に従います。

### ▼ ドメインコントローラを変更するには

- 1 **Identity Synchronization for Windows** 管理コンソールを起動します。
- 2 **Configuration** タブを選択します。「ディレクトリソース」ノードを展開します。
- 3 適切な **Active Directory** ソースを選択します。
- 4 「コントローラの編集」をクリックし、新しいドメインコントローラを選択します。  
選択したドメインコントローラを、ドメインの NT PDC FSMO ロール所有者にします。
- 5 構成を保存します。
- 6 **Active Directory** コネクタが動作しているホストで、Identity Synchronization サービスを停止します。
- 7 *ServerRoot/isw-hostname/persist/ADPxxx* の下にある、ディレクトリを除くすべてのファイルを削除します。ここで、*xxx* は **Active Directory** コネクタ ID の数字部分です。たとえば、Active Directory コネクタ ID が **CNN100** の場合、この数字は **100** です。
- 8 **Active Directory** コネクタが動作しているホストで、Identity Synchronization サービスを開始します。
- 9 単方向または双方向の同期について説明した節に示されている同期フローに従い、手順を進めます。

### フェイルオーバーと Directory Server

旧バージョン形式の更新履歴ログデータベースと、同期されるユーザーがいるデータベースのどちらか一方または両方が、重大な障害によって影響を受ける可能性があります。

## ▼ Directory Server のフェイルオーバーを管理するには

### 1 旧バージョン形式の変更ログデータベース。

旧バージョン形式の更新履歴ログデータベースで、Directory Server コネクタが処理できない変更が発生した可能性があります。旧バージョン形式の更新履歴ログデータベースの復元に意味があるのは、バックアップに未処理の変更が含まれる場合に限られます。`ServerRoot/isw-hostname/persist/ADPxxx/accessor.state` ファイル内の最新のエントリを、バックアップ内の最後の `changenumber` と比較します。`accessor.state` の値がバックアップ内の `changenumber` 以上である場合は、データベースを復元しないでください。その代わりに、データベースを再作成してください。

旧バージョン形式の更新履歴ログデータベースが再作成されたあとで、必ず `idsync preps` を実行してください。別の方法として、Identity Synchronization for Windows 管理コンソールの「ディレクトリソース」ウィンドウで「Directory Server の準備」をクリックします。

Directory Server コネクタは、旧バージョン形式の更新履歴ログデータベースが再作成されたことを検出し、警告メッセージをログに出力します。このメッセージは無視しても安全です。

### 2 同期対象データベースの場合

同期対象データベースのバックアップが利用できない場合、Directory Server コネクタを再インストールする必要があります。

同期対象データベースをバックアップから復元できる場合は、双方向または単方向の同期について説明した節の手順に従います。

## Identity Synchronization for Windows の既知の問題点

この節では、既知の問題点の一覧を示します。既知の問題点にはバグ ID が関連付けられています。

- 4997513 Windows 2003 システムでは、ユーザーが次回ログオン時にパスワードを変更しなければならない設定がデフォルトでオンになっています。Windows 2000 システムでは、この設定はデフォルトではオフです。

Windows 2000 および Windows 2003 システムで「ユーザーは次回ログオン時にパスワードの変更が必要」設定をオンにしてユーザーを作成すると、Directory Server 上ではパスワードなしのユーザーが作成されます。ユーザーが次回 Active Directory にログインするとき、ユーザーはパスワードを変更する必要があります。この変更により、そのユーザーの Directory Server 上でのパスワードは無効化されます。またこの変更により、そのユーザーが次回 Directory Server への認証を行うときに、オンデマンドでの同期が強制的に必要になります。

- Active Directory 上でパスワードを変更するまでの間、ユーザーは Directory Server への認証を行うことができません。
- 5077227 Remote Administration 2.1 を含む pcAnywhere 10 で Identity Synchronization for Windows コンソールを表示しようとすると、問題が発生する可能性があります。pcAnywhere バージョン 9.2 では、同様の問題の発生は確認されていません。問題が解決しない場合は、リモート管理ソフトウェアを削除してください。代替としては VNC を使用できます。VNC では、Identity Synchronization for Windows コンソールの表示に関する既知の問題は確認されていません。
- 5097751 FAT 32 でフォーマットされたファイルシステム上の Windows システムに Identity Synchronization for Windows をインストールする場合、ACL は利用できません。また、セットアップ時にアクセス制限が施行されません。セキュリティを確保するために、Identity Synchronization for Windows のインストールは必ず、NTFS ファイルシステム上の Windows に対して行うようにしてください。
- 6254516 コンシューマ上で Directory Server プラグインをコマンド行を使用して設定するとき、プラグインはコンシューマに対して新しいサブコンポーネント ID を生成しません。プラグイン設定はコンシューマに対して新しい ID を生成しません。
- 6288169 Identity Synchronization for Windows 用のパスワード同期プラグインは、accountlock および passwordRetryCount をチェックする前であっても、未同期のアカウントについて Active Directory へのバインドを試みます。
- この問題点を解決するには、LDAP サーバー上でパスワードポリシーを施行します。また、ユーザー検索時に次のフィルタを使用するように Access Manager を設定します。
- ```
( | ( !(passwordRetryCount=*) ) (passwordRetryCount <=2) )
```
- ただしこの対処策では、LDAP 経由でのログイン試行数が多すぎるときに「ユーザーが見つからない」エラーが返されます。この対処策では、Active Directory アカウントをブロックしません。
- 6331956 o=NetscapeRoot がレプリケートされる場合に、Identity Synchronization for Windows コンソールが起動に失敗します。
- 6332197 ユーザー情報がまだ作成されていないグループを Directory Server 上で同期すると、Identity Synchronization for Windows はエラーを返します。
- 6336471 Identity Synchronization for Windows プラグインは、連鎖されたサフィックスを通じた検索を行うことができません。結果として、Directory Server インスタンス上で変更およびバインド操作を実行できません。

- 6337018 Identity Synchronization for Windows で、XML ファイルへの Identity Synchronization for Windows 設定のエクスポートがサポートされているべきですが、実際にはサポートされていません。
- 6386664 Identity Synchronization for Windows は、グループ同期機能を有効にした時点で Active Directory と Directory Server の間のユーザーおよびグループの情報を同期します。コマンド行から `resync` コマンドが発行されてからはじめて同期が発生するのが理想的な動作です。
- 6452425 SUNWt1s パッケージのバージョン 3.11.0 がインストールされている Solaris システムに Identity Synchronization for Windows をインストールすると、管理サーバーが起動しない場合があります。この問題を解決するには、Identity Synchronization for Windows をインストールする前に SUNWt1s パッケージをアンインストールします。
- 6251334 Active Directory ソースの変更後であっても、ユーザー削除の同期を停止できません。したがって、同期対象ユーザー (SUL) リストが同じ Active Directory ソース内の別の組織ユニット (OU) にマップされる場合、削除の同期は継続します。ユーザーは Directory Server インスタンス上では削除されたように見えます。SUL マッピングを持たない Active Directory ソースからユーザーが削除される場合でも、ユーザーは削除されたように見えます。
- 6335193 ユーザーを Directory Server から Active Directory に同期する目的で、再同期コマンドの実行を試みる場合があります。未同期のユーザーが未同期グループに追加されると、グループエンティティの作成に失敗します。
- この問題を解決するには、同期が正しく行われるように、`resync` コマンドを 2 回実行する必要があります。
- 6339444 同期ユーザーリストで「ベース DN」ペインの「参照」ボタンを使用して、同期の範囲を指定できます。範囲を指定するとき、サブフィックスは取得されません。
- この問題点に対処するには、読み取りおよび検索に対して匿名アクセスを許可する ACI を追加します。
- 6379804 このエラーは、Windows システム上で Identity Synchronization for Windows のコアコンポーネントをバージョン 1.1 SP1 にアップグレードする際に発生します。`updateCore.bat` ファイルで、管理サーバーへの参照がハードコードされている部分に誤りがあります。その結果、アップグレード処理の一部が正常に完了しません。
- この問題を解決するには、ユーザーは、アップグレードスクリプトの管理サーバーを参照している部分 (2 箇所) を置き換える必要があります。

アップグレードスクリプトの 51 行目と 95 行目の次の命令を置き換えます。変更する行は次のとおりです。

```
net stop "Sun Java(TM) System Administration Server 5.2"
```

この行を次のように変更します。

```
net stop admin52-serv
```

指示どおりに変更を行ったあとで、アップグレードスクリプトを再実行してください。

- 6388872 Directory Server で、Active Directory に対する Windows の作成式について、フロー `cn=%cn%` はユーザーとグループの両方に対して機能します。それ以外のすべての組み合わせに対し、Identity Synchronization for Windows は同期中にエラーを発生します。
- 6332183 ユーザー `dn: user1, ou=isw_data` を既存のグループ `dn: DSGroup1, ou=isw_data` に追加するシナリオを考えます。ユーザーをグループから削除する (削除操作を実行する) と、グループの `uniquemember` が変更されます。ここで、同じ DN を持つグループに同じユーザーが追加されると仮定します。ユーザー `dn: user1, ou=isw_data` に対して追加操作が実行されます。
- 削除が可能になる前に追加操作のフローが Directory Server から Active Directory に移ると、Identity Synchronization for Windows は、ユーザーがすでに存在するという例外をログに出力する可能性があります。同期中に削除操作よりも先に追加操作が実行される競合状況が発生する可能性があります。結果として、Active Directory が例外をログに出力します。
- 6444341 Identity Synchronization for Windows のアンインストールプログラムがローカライズされていません。WPSyncResources\_X.properties ファイルの `/opt/sun/isw/locale/resources` ディレクトリへのインストールが失敗します。
- この問題点に対処するには、不足している WPSyncResources\_X.properties ファイルを、`installer/locale/resources` ディレクトリから手動でコピーします。
- 6444878 Java Development Kit (JDK) バージョン 1.5.0\_06 のインストールと設定は、管理サーバーを実行する前に行ってください。
- 6444896 Identity Synchronization for Windows のテキストベースインストールの実行時に、管理パスワードを空にしたまま Enter キーを押すと、インストールプログラムが終了します。

- 6452538 Windows プラットフォームで、Identity Synchronization for Windows によって使用される Message Queue 3.5 では、PATH 値の長さが 1K バイト未満である必要があります。これよりも長い値は切り捨てられます。
- 6486505 Windows では、Identity Synchronization for Windows は英語および日本語ロケールのみをサポートします。
- 6477567 Directory Server Enterprise Edition 6.2 で、Identity Synchronization for Windows 用の Directory Server プラグインは Directory Server インストールとともにインストールされます。Identity Synchronization for Windows のインストーラでは Directory Server プラグインはインストールされません。代わりに、Identity Synchronization for Windows はプラグインの設定のみを行います。
- このリリースの Identity Synchronization for Windows では、テキストベースのインストーラによるインストール処理中に、Identity Synchronization for Windows 用 Directory Server プラグインの設定が要求されることはありません。対処策として、Identity Synchronization for Windows インストールの完了後に、コマンドプロンプトから `Idsync dspluginconfig` コマンドを実行します。
- 6472296 日本語 Windows システムにインストールする際に一部のローカライズパッケージがインストールされず、Identity Synchronization for Windows のユーザーインタフェースの一部が英語で表示される場合があります。
- この問題点に対処するには、インストールを開始する前に、PATH 環境変数に `unzip.exe` を追加します。
- 6485333 インストーラとアンインストーラが一部国際化されていないため、英語のメッセージが表示されます。
- 6492125 中国語および韓国語ロケールでは、Identity Synchronization for Windows のオンラインヘルプの内容が正しく表示されません。
- 6501874 Directory Server パスワード互換モード (`pwd-compat-mode`) が `DS6-migration-mode` または `DS6-mode` に設定されている場合、Directory Server から Active Directory へのアカウントのロックアウトの同期が失敗します。
- 6501886 Active Directory ドメインの管理者パスワードを変更した場合、Identity Synchronization for Windows コンソールに警告が表示される現象が確認されています。使用しているパスワードが有効な場合でも、表示される警告は「ホストのクレデンシャルが無効です:`hostname.domainname`」となります。
- 6529349 Solaris SPARC では、`/usr/share/lib/mps//jss4.jar` ファイルが存在しないと Identity Synchronization for Windows がアンインストールされない可能性があります。これは、製品インストールの実行時に、インストーラが

すでにインストールされている SUNWjss パッケージのインスタンスを検出し、これを更新しない場合のみに発生します。

この問題を回避するには、製品のインストール時に、Java クラスパスに /usr/share/lib/mps/secv1/jss4.jar を追加します。

```
$JAVA_EXEC -Djava.library.path=./lib \  
-classpath "${SUNWjss}/usr/share/lib/mps/secv1/jss4.jar:\  
${SUNWjss}/usr/share/lib/mps/jss4.jar:\  
${SUNWxrcsj}/sfw/share/lib/xerces-200.jar:./lib/installsdk.jar:\  
./lib/ldap.jar:./lib/webstart.jar:\  
${SUNWiquc}/usr/share/lib/jms.jar:./lib/install.jar:\  
./resources:./locale/resources:./lib/common.jar:\  
./lib/registry.jar:./lib/ldapjdk.jar:./installer/registry/resources" \  
-Djava.util.logging.config.file=./resources/Log.properties \  
-Djava.util.logging.config.file=./resources/Log.properties \  
-Dcom.sun.directory.wps.logging.redirectStderr=false \  
-Dcom.sun.directory.wps.logging.redirectStdout=false \  
uninstall_ISW_Installer $1
```

6572575 resync 中にグループ同期を正常に動作させるには、ユーザーおよびグループの両方が同期のスキームの同一レベルに存在しなければなりません。そうでなければエラーが表示されます。

# Directory Editor の修正されたバグと既知の問題点

---

この章では、Directory Editor のリリース時点で公開されている、製品固有の重要な情報を示します。

この章では、次の内容について説明します。

- 75 ページの「[Directory Editor で修正されたバグ](#)」
- 76 ページの「[Directory Editor の既知の問題点と制限事項](#)」

## Directory Editor で修正されたバグ

この節では、Directory Editor の前回のリリース以降に修正されたバグの一覧を示します。

- |         |                                                                              |
|---------|------------------------------------------------------------------------------|
| 6319791 | Directory Editor にログインしたあと、Application Server 管理コンソールにアクセスできない。              |
| 6404788 | デフォルトのユーザーロールからブラウザ機能を削除すると、ユーザーは自分のディレクトリ情報を変更できなくなる。                       |
| 6421100 | Directory Editor が、アンパサンド文字 (&) を含むエントリを正しく処理しない。                            |
| 6433198 | Directory Editor では、アンパサンド文字 (&)、等号 (=)、または疑問符 (?) を含む名前を持つグループにメンバーを追加できない。 |
| 6444426 | 基本検索でフィルタ条件が考慮されない。代わりに、検索では、選択した型に一致する管理対象ディレクトリ内のすべてのエントリが返される。            |
| 6444329 | Directory Editor で、複数バイトのユーザー ID でのログインができない。                                |
| 6460611 | Directory Editor では、複数バイトの DN を含む設定サフィックスを使用できない。                            |

## Directory Editor の既知の問題点と制限事項

この節では、リリース時点での既知の問題点および制限事項の一覧を示します。

### Directory Editor の制限事項

この節では、製品の制限事項の一覧を示します。制限事項には、必ずしもバグ ID が関連付けられるわけではありません。

### Directory Proxy Server 経由で Directory Editor を使用するときの設定要件

Directory Proxy Server 経由でデータにアクセスする目的で Directory Editor を設定するとき、次の制約に従う必要があります。

- Directory Editor の設定ディレクトリは、Directory Proxy Server ではなく Directory Server のインスタンスである必要があります。

Directory Editor の設定ディレクトリは、Directory Editor を初期設定するときに「起動プロパティ」ページで指定します。設定ディレクトリには、「起動プロパティ」ページで指定するバインド DN とパスワードで構成されるエントリが含まれている必要があります。また設定ディレクトリには、「起動プロパティ」ページのドロップダウンリストでその DN を選択する設定サフィックスも存在する必要があります。

- Directory Editor を使用してデータにアクセスするときの中継点となるすべての Directory Proxy Server インスタンスに対して、ディレクトリスキーマを検索するためのアクセス用のデータビューを設定する必要があります。Directory Server に対して、スキーマは cn=schema 下に格納されます。

たとえば、次のコマンドは、My Pool 内の Directory Server インスタンスへのスキーマビューを設定します。

```
$ dpconf create-ldap-data-view -h localhost -p 1390 "schema view" \  
  "My Pool" cn=schema  
Enter "cn=Proxy Manager" password:  
$
```

- Directory Editor を使用してデータにアクセスするときの中継点となるすべての Directory Proxy Server インスタンスを、データソースへのアクセスを提供するように設定する必要があります。特に、Directory Proxy Server インスタンスは、最低限 Directory Server データソースにバインドする目的で Directory Editor へのログインをユーザーに許可するように設定されたデータビューを備える必要があります。

たとえば、次のコマンドは、接続されたデータソース (My Pool 内の My DS) に対するすべての LDAP 操作の経路となるように Directory Proxy Server を設定します。

```
$ dpconf set-attached-ldap-data-source-prop -h localhost -p 1390 \
  "My Pool" "My DS" add-weight:1 bind-weight:1 compare-weight:1 delete-weight:1 \
  modify-dn-weight:1 modify-weight:1 search-weight:1
Enter "cn=Proxy Manager" password:
$
```

## Directory Editor の既知の問題点

この節では、既知の問題点の一覧を示します。既知の問題点にはバグ ID が関連付けられています。

- 6257547 Directory Editor で表示される検索結果の数は設定可能であり、デフォルトは 25 個です。最大表示数を超える数のエントリが検索で返される場合、検索を絞り込んで結果件数を減らします。
- 6258793 Sun Java Enterprise System Application Server 8 への配備時にエラーファイルが出力されます。また、ログインに失敗します。

この問題点に対処するには、`Server.policy` ファイルに次の `grant` 文が含まれていることを確認します。

```
grant codeBase "file:${de.home}/-" {
  permission javax.security.auth.AuthPermission "getLoginConfiguration";
  permission javax.security.auth.AuthPermission "setLoginConfiguration";
  permission javax.security.auth.AuthPermission "createLoginContext.SunDirectoryLogin";
  permission javax.security.auth.AuthPermission "modifyPrincipals";
  permission java.lang.RuntimePermission "createClassLoader";
};
```

ここで指示している `grant` 文を使用してください。『Sun Java System Directory Editor 1 2005Q1 Installation and Configuration Guide』に示されている `grant` 文は正しくありません。

- 6397929 Tomcat 5.5 への配備時に、JAAS 設定ファイルが見つからないことが原因でログインに失敗します。

この問題点に対処するには、まず、次の行を含む `tomcat-install-path/bin/setenv.sh` ファイルを作成します。

```
JAVA_OPTS="-Djava.security.auth.login.config=$CATALINA_HOME/conf/jaas.conf"
```

次に、`tomcat-install-path/conf/jaas.conf` ファイルを作成します。次の行が含まれるようにファイルを編集します。

```
SunDirectoryLogin {
  com.sun.dml.auth.SunDirectoryLoginModule required;
};
```

- 6436199 Directory Editor で、デフォルトのユーザーフォーム Create に対して行った変更が保持されません。この問題は、Directory Editor が動作するアプリケーションコンテナが、変更が検証される前に再起動されるときに発生します。

この制限に対処するには、設定を復元したあとでアプリケーションコンテナを再起動しないようにします。代わりに、ログインし、「設定」タブで管理対象ディレクトリを検証し、保存して再びログインします。

- 6441350 英語以外のロケールで動作している Application Server 上に配備した Directory Editor で起動設定ページを保存したあとに、アプリケーションエラーが表示される場合があります。

この問題点に対処するには、UNIX システムの場合は英語ロケールで Application Server を起動します。Windows システムの場合は、Application Server を何回か再起動してみてください。

- 6456576 Application Server に配備された Directory Editor で「ヘルプ」ボタンをクリックすると、ヘルプコンテンツが正しく表示されません。

この問題点に対処するには、次のように Web-INF/sun-web.xml を編集してから、Application Server を再起動します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!DOCTYPE sun-web-app PUBLIC "-//Sun Microsystems, Inc.//DTD
Sun ONE Application Server 7.0 Servlet 2.3//EN"
"http://www.sun.com/software/sunone/appserver/dtds/sun-web-app_2_3-0.dtd">
<sun-web-app>
  <description>tomcat-test</description>
  <class-loader delegate="false"/>
</sun-web-app>
```

- 6480803 英語以外のロケールで動作している Application Server に配備されている場合、ブラウザの言語設定を en または en\_US に切り替えても、Directory Editor のインタフェースは英語で表示されません。

この問題点に対処するには、次のコマンドを実行します。

```
# cd /var/opt/SUNWappserver/domains/domain1/applications/j2ee-modules/de/config
# cp DMLMessages.properties DMLMessages_en.properties DMLMessages_en_US.properties
```

- 6487652 ユーザー ID に複数バイト文字が含まれているユーザーとしてログインした場合、自分のディレクトリ情報を編集できません。「Edit My Directory Information」をクリックすると、空白ページが表示されます。
- 6488644 英語以外のロケールで動作している Directory Editor に一般ユーザーとしてログインした場合、「ホーム」ページおよび「Change My Directory Password」ページはローカライズされていません。

- 6489725 Windows 上の Apache Tomcat に英語以外のロケールで Directory Editor をインストールした場合、設定、保存、および更新操作を行うとエラーページが表示されます。
- 6490590 英語以外のロケールで Directory Editor をインストールする場合、インストーラのテキストやメニューが正しく表示されません。
- この問題点に対処するには、UNIX システムの場合は、インストーラを実行する前に英語ロケールに変更します。Windows システムの場合は、インストーラを実行する前に、「コントロールパネル」>「地域と言語のオプション」を使用してロケールを英語に切り替えます。
- 6492259 スペイン語ロケールで動作している Internet Explorer 6 で Directory Editor にアクセスしている場合、オンラインヘルプに文字化けが発生します。
- 6493975 Directory Editor では、複数のサフィックスを表示できません。
- この問題点に対処するには、別のアプリケーションサーバーまたは同じアプリケーションサーバー上の別のドメインに、Directory Editor を追加でインストールします。



# Directory Server Resource Kit の修正されたバグと既知の問題点

---

この章では、Directory Server Resource Kit のリリース時点で判明している、製品固有の重要な情報を示します。

この章では、次の内容について説明します。

- 81 ページの「[Directory Server Resource Kit について](#)」
- 83 ページの「[Directory Server Resource Kit で修正されたバグ](#)」
- 83 ページの「[Directory Server Resource Kit の既知の問題点と制限事項](#)」

## Directory Server Resource Kit について

この節では、Directory Server Resource Kit コンポーネントの概要を示します。

Directory Server Resource Kit は、開発、配備、データセンター運用の各段階でディレクトリサービス関連の作業を行うためのツールを提供します。

### ディレクトリサブツリーの削除

LDAP のディレクトリサブツリー全体を 1 つのコマンドで削除するには、`ldapsubtdel(1)` ツールを使用します。

### DSML v2 アクセス

Web アプリケーションの設計、開発、およびテスト時に DSML v2 経由のディレクトリアクセスをテストするには、次のツールを使用します。

- `dsmlmodify(1)` コマンド: エントリの追加、削除、変更、名前変更、および移動
- `dsmlsearch(1)` コマンド: エントリの検索と読み取り

### LDAP パフォーマンス測定

LDAP によるディレクトリへのアクセス時にバインド、読み取り、および書き込みのパフォーマンスを測定するには、次のツールを使用します。

- `authrate(1)` コマンド: LDAP バインドパフォーマンスの測定
- `modrate(1)` コマンド: LDAP 書き込みパフォーマンスの測定

- `searchrate(1)` コマンド: LDAP 読み取りパフォーマンスの測定

### LDIF の生成と変換

サイズ調整およびチューニングのためのサンプル LDIF を生成するには、次のツールを使用します。これらのツールは、相互運用性のために LDIF を変換、ソート、フィルタする目的にも使用します。

- `ldifxform(1)` コマンド: LDIF の変換、ソート、フィルタ
- `makeldif(1)` コマンド: サンプル LDIF の生成

### サービスのチューニング

クライアントのディレクトリサービス利用状況の検証や、インデックス作成用の推奨値の生成には、`logconv(1)` コマンドを使用します。

選択により、ディレクトリサーバーと同じシステムまたは別のシステム上に Directory Server Resource Kit ツールをセットアップして実行できます。どちらの選択が適切かは作業環境によって異なります。また、配備のどの段階に到達しているかによっても選択が変わります。次に示す質問と回答は、Directory Server Resource Kit をどのシステムにインストールして利用するかの判断に役立ちます。

質問: 現在の作業の目的は、ディレクトリサービスを実際に開発する前にディレクトリ技術を評価または例証することですか。

回答: この場合は便宜性を優先して、ディレクトリと同じシステム上に Directory Server Resource Kit をインストールして利用します。

質問: 現在の作業の目的は、ディレクトリクライアントアプリケーションまたはプラグインを開発することですか。

回答: この場合は便宜性を優先して、ディレクトリと同じシステム上に Directory Server Resource Kit をインストールして利用します。

質問: 現在の作業の目的は、ディレクトリのパフォーマンス特性をテストすることですか。

回答: ディレクトリサービスを提供するシステム上で実行する必要がある唯一のコマンドは、システム固有のチューニング推奨値を生成する `idsktune` コマンドです。

回答: したがってこの場合は、測定対象のシステムへの影響を回避するために、ほかのシステムに Directory Server Resource Kit をインストールし、`idsktune` 以外のコマンドを実行します。

`authrate`、`modrate`、`searchrate` などのクライアントを独立したシステム上で実行することにより、ディレクトリパフォーマンスの正確な測定結果が得られます。測定対象のシステム上で動作するプロセスを注意深く制御することにより、測定精度を向上させることができます。ディレクトリに格納するサンプルデータを制御することによっても精度を向上させることができます。制御されたデータは `makeldif` を使用して生成できます。

質問:ディレクトリをデータセンターに配備済みですか。

回答:この場合は、配備済みシステムへの影響を回避するために、ほかのシステムに Directory Server Resource Kit をインストールして各種コマンドを実行します。

logconv による分析や、ldifxform による LDIF 変換などのその他の操作も外部のシステムから実行します。

## Directory Server Resource Kit で修正されたバグ

この節では、Directory Server Resource Kit の前回のリリース以降に修正されたバグの一覧を示します。

- 4536646 searchrate コマンドに、タイムアウトを指定するオプションがあるべきである。
- 4994437 authrate の使用法を修正する。
- 5005829 searchrate の使用法を修正する。
- 5005834 modrate の使用法を修正する。
- 5009664 ldifxform コマンドをto=cs とともに使用した場合、正しく変換されない。
- 5034829 ldapsubtdel コマンドで、ファイルからのパスワード読み取りを許可するべきである。
- 5082075 authrate コマンドで、バインドエラーを送信するべきである。
- 5082493 dsmlsearch コマンドで、LDAP フィルタ文字列構文を処理するべきである。
- 5083049 dsmlmodify の使用法を修正する。
- 5083952 Windows システムで ldifxform コマンドに -c to=ascii オプションを使用すると、クラッシュする。
- 5084253 logconv -d オプションがゼロ除算エラーを生成する。

## Directory Server Resource Kit の既知の問題点と制限事項

この節では、リリース時点での既知の問題点および制限事項の一覧を示します。

- 5081543 searchrate は、Windows システムで複数のスレッドを使用するとクラッシュします。
- 5081546 modrate は、Windows システムで複数のスレッドを使用するとクラッシュします。
- 5081549 authrate は、Windows システムで複数のスレッドを使用するとクラッシュします。

- 5082507 dsmlsearch コマンドの `-D` オプションは、バインド DN ではなく HTTP ユーザー ID を取ります。
- この問題点に対処するには、Directory Server 内の DN にマップされたユーザー ID を指定します。
- 6379087 NameFinder を Windows システム上の Application Server に配備できない現象が確認されています。
- 6393554 NameFinder が、配備のあとにエラーが見つからないページをスローする現象が確認されています。
- この問題点に対処するには、`nsDSRK/nf` の名前を `nsDSRK/NF` に変更します。
- 6393586 NameFinder の「My Selections」リストには、2 名を超えるユーザーを追加できません。
- 6393596 NameFinder では、「LastName」、「FirstName」、「Email」、および「GivenName」以外のエントリ値を検索できません。
- 6393599 NameFinder では、グループの検索ができません。
- 6576045 `modrate` および `searchrate` 起動プログラムを終了しても、実際の `modrate` および `searchrate` の各プロセスは終了しません。